

『文化財と技術』

第7号

<特集 ヤマト王権と地域王権／技術の繋がり>

第一部 ヤマト王権と地域王権／技術の繋がり

- 鈴木勉 三角縁神獣鏡製作地論と古墳時代研究
 前田亮 技術と継承 ―その繋がり―
 福井卓造・鈴木勉 ヤマト王権と地域王権の確執
 ―遅らされた技術移転「冶鉄技術」―
 上村武 岡山県猿喰池製鉄遺跡の製鉄炉と技術継承論
 李東冠・武末純一 百済の鉄と製鋼技術に関する試論
 ―梯形鑄造鉄斧を中心に―
 金跳咏 東北アジアにおける鉄器文化の到来と限冶供鉄政策
 鈴木勉・金跳咏 新山古墳・大成洞古墳群 88 号墳出土
 金銅製帶金具などの円文たがね

第二部 古代東アジアの装飾技術

- 沢田むつ代 古墳出土の鉄刀と鉄剣の
 柄巻きと鞘巻きの種類と仕様の事例
 金字大 新羅における垂飾付耳飾の系統と変遷
 李漢祥 皇南大塚北墳嵌玉腕輪の製作工程と製作地
 金跳咏・鈴木勉 皇南大塚北墳出土「夫人帯」銘銀製帶金具の線彫り技術について
 鈴木勉 朝鮮半島三国時代の彫金技術 その 15～19
 その 15 国立慶州博物館・菊隠 collection 大刀の双連珠凸魚々子文
 ―藤ノ木古墳出土鞍金具の出自を求めて―
 その 16 天安龍院里出土龍文環頭大刀の金板圧着技法とは
 その 17 李漢祥「陝川玉田 M3 号墳龍鳳紋大刀の
 環部製作工程」への批判
 その 18 慶尙南道 咸陽郡 白川里 1 号出土大刀のうろこ文の打ち出し
 その 19 全北高敞郡雅山面鳳德里古墳群 1 号墳出土飾履の
 製作技術の疑問

第三部 復元研究報告

- 鈴木勉 群馬県山王金冠塚金銅製冠の復元 4～6
 4 新羅の出字形冠 その 2
 5 林堂洞 7 A 号墳金銅製冠
 6 林堂洞 7 C 号墳金銅製冠

<付録>

- 鈴木勉 三角縁神獣鏡の仕上げ加工痕と製作体制
 (『河上邦彦古稀記念論集』2015 年より転載)

『文化財と技術』第7号 目次

＜特集 ヤマト王権と地域王権／技術の繋がり＞

第一部 ヤマト王権と地域王権／技術の繋がり

三角縁神獣鏡製作地論と古墳時代研究	鈴木 勉	5
技術と継承 ―その繋がり―	前田 亮	10
ヤマト王権と地域王権の確執 ―遅らされた技術移転「冶鉄技術」―	福井卓造・鈴木勉	32
岡山県猿喰池製鉄遺跡の製鉄炉と技術継承論	上 梶 武	40
百済の鉄と製鋼技術に関する試論 ―梯形鑄造鉄斧を中心に―	李東冠・武末純一	63
東北アジアにおける鉄器文化の到来と限冶供鉄政策	金 跳 咏	78
新山古墳・大成洞古墳群 88 号墳出土 金銅製帯金具などの円文たがね	鈴木勉・金跳咏	101

第二部 古代東アジアの装飾技術

古墳出土の鉄刀と鉄剣の柄巻きと鞘巻きの種類と仕様の事例	沢田むつ代	111
新羅における垂飾付耳飾の系統と変遷	金 宇 大	143
皇南大塚北墳嵌玉腕輪の製作工程と製作地	李 漢 祥	180
皇南大塚北墳出土「夫人帯」銘銀製帯金具の線彫り技術について	金跳咏・鈴木勉	197
朝鮮半島三国時代の彫金技術 その 15 ～ 19	鈴木 勉	205
その 15 国立慶州博物館・菊隠 collection 大刀の双連珠凸魚々子文 ―藤ノ木古墳出土鞍金具の出自を求めて―		
その 16 天安龍院里出土龍文環頭大刀の金板圧着技法とは		
その 17 李漢祥「陝川玉田 M3 号墳龍鳳紋大刀の環部製作工程」への批判		
その 18 慶尙南道 咸陽郡 白川里 1 号出土大刀のうろこ文の打ち出し		
その 19 全北高敞郡雅山面鳳德里古墳群 1 号墳出土飾履の製作技術の疑問		

第三部 復元研究報告

群馬県山王金冠塚金銅製冠の復元 4 ～ 6	鈴木 勉	223
4 新羅の出字形冠 その 2		
5 林堂洞 7 A 号墳金銅製冠		
6 林堂洞 7 C 号墳金銅製冠		

＜付録＞

三角縁神獣鏡の仕上げ加工痕と製作体制 (『河上邦彦古稀記念論集』2015 年より転載)	鈴木 勉	233
--	------	-----

第二部 古代東アジアの装飾技術

古墳出土の鉄刀と鉄剣の柄巻きと鞘巻きの種類と仕様の事例	沢田むつ代	111
新羅における垂飾付耳飾の系統と変遷	金 宇 大	143
皇南大塚北墳嵌玉腕輪の製作工程と製作地	李 漢 祥	180
皇南大塚北墳出土「夫人帯」銘銀製帯金具の線彫り技術について	金跳咏・鈴木勉	197
朝鮮半島三国時代の彫金技術 その 15 ～ 19	鈴 木 勉	205
その 15 国立慶州博物館・菊隠 collection 大刀の双連珠凸魚々子文 －藤ノ木古墳出土鞍金具の出自を求めて－		205
その 16 天安龍院里出土龍文環頭大刀の金板圧着技法とは		208
その 17 李漢祥「陝川玉田 M3 号墳龍鳳紋大刀の環部製作工程」への批判		210
その 18 慶尙南道 咸陽郡 白川里 1 号出土大刀のうろこ文の打ち出し		214
その 19 全北高敞郡雅山面鳳德里古墳群 1 号墳出土飾履の製作技術の疑問		217

古墳出土の鉄刀と鉄剣の柄巻きと鞘巻きの種類と仕様の事例

沢田むつ代

はじめに

毎年、全国各地で数多くの発掘調査が行なわれている。とりわけ古墳時代の墓には、数多くの副葬品が埋納されている場合が多い。これら副葬品は時代によって変化が認められるが、一般的に、前期は鏡や石製の腕飾り、玉類等が主である。中期になると、甲冑をはじめ、鉄刀や鉄剣、馬具、鉄鏃等といった金属製の武器や武具等の埋納が中心になってくる。やがて後期になると、これらの武器・武具等の埋納もみられるが、身の周りの品を収めるように変化がみられる。

中期や後期の金属製品には、しばしば繊維（織物や組紐等）が付着していることがある。また、『報告書』には繊維と思われるものが錆着して遺存している図版が掲載されている場合もみられる。しかし、こと遺物に付着している繊維については、『報告書』をみても繊維の種類や技法等に関する詳細が記されている例はごくわずかで、使用方法や用途について踏み込んだ記述はほんの一部にすぎない。遺物に付着した繊維を詳細に調べることによって、遺物本体に関係した繊維か、他のものが付着した繊維なのかを見極めることにより、遺体埋葬における副葬品の埋納仕様等を推測することが可能となる。

本稿ではとくに古墳出土の鉄刀と鉄剣に付着した繊維を取り上げることとする。両者には多くの場合、劣化しているとはいえ柄木や鞘木を伴っていることもあり、保存状態にもよるが、繊維が遺存していることも少なからずある。これらの繊維の多くは、柄木や鞘木を緊縛する目的で用いられた柄巻きと鞘巻きに使用されたものなどである。柄巻きと鞘巻きについては以前、報告をしたことがある¹が、それ以降、種類や点数も増え、とりわけこれまでにない装飾的な仕様例が見いだされたので、再度、整理をして、これらに用いられている繊維について、種類や技法、仕様などを明らかにし、地域的な特徴などをみていくことにしたい。

柄巻きと鞘巻きにはどのような種類の繊維が使われ、どんな技法で、どういった仕様になっているか、小稿末尾の表「鉄刀・鉄剣の柄巻きと鞘巻きの種類と仕様」にまとめた。これを基に説明していくことにしたい。

まず、柄巻きの例からみていくと、もっとも単純な糸巻きがある。糸巻きといってもさまざまな種類がみられ、身近な植物の樹皮を用いた例、植物繊維を撚り合わせて糸にしたもの、組紐、少し技術的な要素が加えられた二本芯並列コイル状二重構造糸巻き²と呼ばれる仕様、平紐巻き、布帯巻きといった種々の仕様が確認できた。さらに、二本芯並列コイル状二重構造糸巻きの上に糸巻き等を巻き付けた、かなり装飾を意識したと考えられる2種類併用巻きの特異な仕様もみられた。

なお、鞘巻きについては、蔓巻きをはじめ、樹皮巻き、装飾的な組紐巻き、帯紐巻きといったさまざまな仕様が確認された。

それでは柄巻き、鞘巻きの順に説明することとする。

1 沢田むつ代「古墳出土の鉄刀・鉄剣の柄巻きと鞘巻き—織物などの種類と仕様—」（『MUSEUM』第617号、2008年、東京国立博物館）。

2 二本芯並列コイル状二重構造糸巻きとは、註1の報告の際につけた仮称で、後に詳述するが、2本の絹糸を芯に、この周りに植物繊維の糸を二重に巻く仕様である。

1 柄巻き (No.1~No.118)

(1) 糸巻き (No.1~No.43)

糸巻きには植物繊維の麻等で巻く場合が多いなかで、絹糸を用いた例もみられた。古墳時代より遡る弥生時代のものであるが、中期後半とみなされる No.1 〈No. 番号は末尾の表の通し番号を表わす。以下同じ〉福岡県・立岩遺跡出土の鉄剣 (10 号甕棺出土) は、『報告書』では「剣身寄りでは幅 3.6cm、長 4.6cm まで両端 0.7cm ばかりのこして細い絹の撚糸を巻き、柄尻寄りでは太い糸で巻く」と報告されている。さらに、「細い絹の撚糸は Z 撚りと S 撚りを交互に巻く」と記述されている (『報告書』は末尾の表、各『報告書』の項参照。以下同じ)。撚りの異なる糸を交互に巻くということは、後述する No.39 千葉県・経僧塚古墳出土の銀装圭頭大刀や No.40・No.41 同県・金鈴塚古墳出土の 2 本の金銅装圭頭大刀にみられるように、異なった撚りの糸 (S 撚り、Z 撚り) を 2 本引き揃えて巻いたもの (経僧塚古墳出土と金鈴塚古墳出土については実物調査をしているので、各々の項で詳細を述べる) と推測される。同じく No.2 立岩遺跡の鉄剣 (39 号甕棺出土) も「柄口から 0.7cm を巻きのこしている」と記述されている。両者とも柄の両端部は糸を巻いていなかったようである。

同じく No.3 同県・門田遺跡出土の鉄剣 (24 号甕棺出土) も絹糸を巻いており、「柄部先端 0.9cm と柄尻 2.8cm の部分には糸巻きはみられない」と報告されている。柄の両端部を巻いていないのは前掲 No.1・No.2 立岩遺跡のものと類似する。また、No.4 鉄剣は絹の Z 撚り糸を巻いている。さらに、後掲の No.26 兵庫県赤穂郡・西野山 3 号墳出土の鉄剣にも絹糸を用いた例がある。

古墳時代においても糸巻きの仕様は多数みられる。No.5 福岡県・セスドノ古墳出土の鉄刀 (6) は、柄木の上に 0.1cm 弱の太さの糸で柄巻きされている。また、No.6 鹿角装鉄剣 (1) と No.7 鉄刀 (5) にも糸巻きがみられ、後者には「太めの糸で巻く」と報告されている。3 点のいずれも糸の撚りなどの詳細は記されていない。

宮崎県下の地下式横穴墓からも糸巻きの鉄剣と鉄刀の事例が 8 例ほどある。No.8・No.9・No.10 大萩地下式横穴墓出土の 3 件は、2 件が鉄剣、1 件が鉄刀で、このうち No.8 の鉄剣は植物繊維と思われる糸を密に巻いており、巻き密度は 1cm 間に 8 本前後となる。また、No.9 の鉄剣は、糸巻きをした上に 2 本引き揃えた糸で、0.6~0.7cm の間隔を開けてさらに螺旋状に巻いた例がある。No.10 の鉄刀は糸幅 0.1cm 前後の植物繊維の糸で、1cm 間の巻き密度は 10 本前後で密に巻いている。No.11 灰ヶ野地下式横穴墓出土の鉄刀は、植物繊維による 2 本の Z 撚り糸同士を今度は S 撚りにした (このような撚り糸を諸撚り糸と呼ぶ) やや太い糸を巻いており、巻き密度は 1cm 間に 5~6 本程度であった (図 1・2)。No.12 新田場 7 号地下式横穴墓出土の鉄剣は、植物



図1 撚り糸巻き (鉄刀: 灰ヶ野地下式横穴墓出土)



図2 同 拡大

繊維によるZ撚りの糸で糸巻きを施している。続いてNo.13 築池地下式横穴墓出土の鉄剣は、幅0.1cm 弱の撚り糸を密に巻いている。No.14・No.15 築池地下式横穴墓出土の鉄剣と鉄刀は、『報告書』によると「細い糸を巻く」と記されているが、撚り糸かどうか不明。

熊本県では5例ある。No.16 方保田東原遺跡(2) 出土の鉄剣は、『報告書』によると、柄木を伴っていないとあり、「茎先には太目の2本撚りを巻き、茎全体には細目の2本撚糸を巻く」と記述されている。柄木がないことから、おそらく茎に直接糸を巻いたことになるため、柄木へ装着する際の緩み防止のために行なわれた仕様と推測される。なお、鉄剣は意識的に「く」の字に曲げられており、刃部付け根でほぼ直角になる。なお、刃部には木質が付着しているの、鞘に納められていたと推測される。同県のNo.17～No.20 向野田古墳出土の鉄剣4本のうち、No.17 鉄剣(1)は糸目の様な痕跡と漆を塗った残片が付着し、糸で「繁・卷・き」(傍点筆者、以下同じ)して、その上に漆を塗ったものと考えられている。なお、「剣身は抜身の状態で布に包まれていた」と記述されているので、裂で包んで埋納されたことがうかがわれる。No.18 鉄剣(2)は幅0.1cm 弱の糸で「繁・卷・き」し、その上に漆を塗っている。巻き密度は0.5cm で6本と報告されている。No.19 鉄剣(3)は槍先の可能性があると指摘されており、糸で「繁・卷・き」した上に漆を塗る。漆を塗る仕様は槍の柄巻きにしばしばみられる。このような仕様は、鉄刀や鉄剣にも行なわれているが、それぞれについては後掲の項で述べる。漆を塗布する仕様は、糸巻きのみではなく、巻き糸の伸びを軽減し、より強固に緊縛することを意図したものであろう。No.20 鉄剣(4)も糸で「繁・卷・き」するとある。なお、No.19とNo.20の両者は、刃部に布の痕跡が遺っていることから、布(裂)に包まれていた可能性が想定される。

山陰地方ではNo.21 島根県・足子谷横穴墓出土の鉄刀は、「糸幅約0.1cmの撚糸を巻き、その上に黒漆を塗り、さらに撚糸を巻く」と報告されている。撚糸を二重に巻いたことになるが、撚糸はS撚りかZ撚りか記述されていない。また、同県のNo.22 連行遺跡出土の銅装圭頭鉄刀は、幅0.2cm 前後の紐状のものを巻き付ける。いわゆる「葛・卷・き」と報告されているが、撚りをかけた糸かどうかはわからない。おそらく糸幅からみて、植物繊維の撚り糸であろうと推察される。また、紐状部分と木質の間に繊維があり、木柄の上に繊維を巻き、さらに紐状のもので巻き締めたと考えられている。こうした例は、後掲No.25 迫山第1号墳出土の銀象嵌鉄刀とNo.40 千葉県・金鈴塚古墳出土の金銅装圭頭大刀(8)にもみられ、後者には平絹と思われる裂を巻き、その上を撚りの異なる糸を揃えて巻いている(図6参照)³。

広島県からは3例があり、No.23 空長古墳群出土の蛇行鉄剣(2)とNo.24 鉄刀であるが、蛇行鉄剣は直径0.05～0.1cmの細糸を「繁・卷・き」するとある。また、No.24の鉄刀には直径0.2cmの紐を「繁・卷・き」すると報告されているが、撚り糸かどうかは不明。同じく同県のNo.25 迫山第1号墳出土の銀象嵌鉄刀は、「布を巻き、その上から糸で巻き締める」とあるが、幅のある布を柄木全体に一枚で巻いたか、細い幅の布を螺旋状に巻き付けたのか、また、漆で接着して固定したうえで糸を巻いたのか詳細は報告されていない。布を巻いたのち糸で巻き締める例は、先述のNo.22 連行遺跡出土の銅装圭頭鉄刀とNo.25 迫山第1号墳出土の銀象嵌鉄刀、後掲のNo.40 金鈴塚古墳出土の金銅装圭頭大刀でもみられることから、あらかじめ織物で巻いたうえで糸巻きを施せば滑りがなく巻きやすかったことと想像する。

3 沢田むつ代「原始古代の織物からみた金鈴塚古墳出土の金糸と織物等」(『金鈴塚古墳研究』第3号、2015年、木更津市郷土博物館金のすず)。

つぎに、兵庫県からも糸巻きが6例ほど報告されている。No.26 赤穂郡西野山3号墳出土の鉄剣は、「身部と柄木との接着部に、幅0.025cmの撚りのない絹糸を幅10.0cmの間に巻き、漆で塗り固める」とある。なお、「1cm間の巻き密度は35本程度」と記されている。同県No.27 中村古墳群・第2主体部出土の鹿角装鉄刀は、「幅0.2cm前後の紐によって49回巻かれている」。なお、木鞘に納められていた。同県No.28 柿坪中山古墳群3号墳石室内より検出された鉄剣は、幅約0.2cmの繊維状のものを巻き付けるとある。同県No.29 長尾・タイ山古墳群出土の鉄刀は「やや太い糸を巻き、上面に赤色顔料を塗る」と報告されている。同じく同県No.30 竹ノ内古墳群出土の鉄刀(1、3号墳出土)とNo.31 鉄刀(2、3号墳出土)は、いずれも柄部の関寄りの位置に撚りのない細い繊維を巻いており、「巻き密度は1cm間に8本」と報告されている。この本数では比較的太い糸で、植物繊維のような糸と推測される。

大阪府からも報告がある。No.32 野中アリ山古墳出土の鉄刀とNo.33 鉄剣は、両者とも柄木の上に黒漆を塗ったのち糸で巻いている。前者は「幅0.25cm～0.3cmの紐をコイル状に一重に巻き並べ、巻き付けは茎全体にわたって40回ほど巻き、木鞘に納めて埋納された」とある。No.33も同様の仕様であるが、糸幅は0.2cm弱で、No.32よりやや細い。いずれも、太さからみて植物繊維であろう。

京都府からはNo.34 離山古墳・離湖古墳出土の鉄刀(第1主体部出土)は、「糸を格子状に巻き付け、菱形連続幾何学模様を作り出し、その上に漆を塗った特異な巻き仕様で、槍の可能性もある」としている。なお、鞘を装着した状態で副葬されたとある。菱形連続幾何学模様を施した仕様は、後述する奈良県のNo.35 寺口忍海古墳群出土の鉄刀にも認められ、槍かとも記されている。こうした仕様は槍や矛の柄巻きにしばしば認められるもので、大阪府の高井田山古墳出土の槍(2)にもみられる⁴。また、徳島県中内遺跡出土の槍にも同様な仕様が報告されている⁵。さらに、北陸地方では、石川県和田山5号墳でも菱形状に細紐を組み、漆で固めた槍が出土している⁶。

関東地方では、No.36 茨城県・三昧塚古墳出土の鉄刀は、柄部を撚糸で「葛巻き」とある。また、同古墳No.37 鹿角装鉄剣には糸巻きが施されており、「0.8cmの間に5本」巻かれている。

千葉県では4例がみられ、No.38 経僧塚古墳出土の鉄刀4は、Z撚りの植物繊維の糸を巻いており(図3)、1本の糸幅は約0.05cm、巻き密度は1cm間に16本前後である。同じく同古墳出土のNo.39 銀装圭頭大刀(鉄刀2)には、S撚りとZ撚りの糸を引き揃えて巻いている(図4)。1本の糸幅は0.05cmで、巻き密度は1cm間に14本前後を数える。また、同県No.40 金鈴塚古墳出土の金銅装圭頭大刀(大刀8)にも、同様に撚りの異なる糸を引き揃えて巻いている例がみられる。同じくNo.41 金銅装圭頭大刀(大刀9)にも同じ手法の糸巻き(図5)が遺っている。なお、No.40 金銅装圭頭大刀(大刀8)は、平絹(絹糸を用いた平織の織物)と思われる裂を巻き、その上を撚りの異なる糸を揃えて巻いている(図6)。

北海道でも、糸巻きの鉄刀が数例報告されている。No.42 恵庭市・西島松5遺跡(P15墓坑底副葬品3)出土の鉄刀2は、柄部に糸巻きした上を漆で固定している。なお、同墓坑(副葬品2)出土のNo.43 鉄刀3は、植物の蔓を巻き付け、同じく漆で固定している。これら2件とも鞘が遺存しているので、鞘部の仕様については後述する。以上、糸巻きについてみてきたが、糸の撚りについて記述されているものはごくわずかで、糸幅を記しているものの、単に糸巻きとか太目の糸で

4 『高井田山古墳』(1996年、柏原市教育委員会)。

5 『中内遺跡』(1981年、徳島県教育委員会)。

6 『加賀能美古墳群』(1997年、石川県寺井町・寺井町教育委員会)。

巻く、または「葛巻き」、「繁巻き」等と報告されているだけである。また、図版からでは撚糸かどうかの見極めは困難である。したがって、Z撚りかS撚りかの判断はつかない。なお、0.2cm 前後の幅であると「紐」と記述される傾向がみられた。



図3 Z撚り糸巻き（鉄刀 4：経僧塚古墳出土）



図4 S撚りとZ撚りの糸を揃えて巻く
（銀装圭頭大刀〈鉄刀 2〉：経僧塚古墳出土）



図5 S撚りとZ撚りの糸を揃えて巻く
（金銅装圭頭大刀〈大刀 9〉：金鈴塚古墳出土）



図6 平絹の上に撚りの異なる糸を揃えて巻く
（金銅装圭頭大刀〈大刀 8〉：金鈴塚古墳出土）

(2) 樹皮巻き (No.44～No.48)

樹皮巻きであるが、一部に樹皮巻きを施す場合 (No.44, No.45) と、全体に樹皮巻きする場合 (No.46～No.48) がみられる。前者は前掲の恵庭市・西島松 5 遺跡 (P11 墓坑底副葬品) 出土品の No.44 鉄刀で、柄部に糸巻きを行ない、その上には柄頭側に樹皮巻き、鐔側にやや太い紐巻きを施している。また、同遺跡 (P30 墓坑底副葬品 2) 出土の No.45 鉄刀 3 は、幅 0.1cm 未満の細い糸と 0.15cm の太い糸を巻き、その上には樹皮巻きを施している。これら 2 件には鞘が遺存しているので、鞘部の仕様については後述する。

一方、柄木の上に樹皮のみを巻く仕様例が宮崎県と三重県から報告されている。

宮崎県では No.46 旭台地下式横穴墓・4 号玄室から検出された鉄刀は、樹皮様繊維を少しずつらせながら巻いている。同県 No.47 平松箱式石棺群出土の鉄剣 (8) は、樹皮巻きと報告されている。

近畿地方では、No.48 三重県・平田古墳群出土の円頭鉄刀 (11) は、「幅 0.2cm の樹皮を巻き付け、

現状では54巻き遣り、漆塗の木鞘に納める」と報告されている。かなり幅の狭い樹皮であるようにみえるが、樹皮巻きをする場合、ある程度幅のある樹皮を少しずつずらせながら巻くので、表に現れている部分の幅はかなり狭くなることが多いため、この場合も幅0.2cmというのは表に現れている部分を計測しているものと推察される。

(3) 組紐巻き (No.49～No.52)

糸巻きや樹皮巻きよりも1本の幅が少し広いものに組紐巻きがある。組紐といっても複雑なものではなく、もっとも単純な三つ組(三つ編み)巻きの例が数例みられる。

宮崎県では、No.49 築池第15号横穴墓出土の蛇行鉄剣柄残片に、植物繊維と思われる糸で三つ組した紐(図7)を用いて柄巻きしたものがわずかに遺っている。No.50 築池8号横穴墓出土の蛇行鉄剣柄残片にも、三つ組巻き(図8)がみられる。また、同県No.51 九塚2号地下式横穴墓出土の鹿角装鉄剣柄残片にも三つ組巻きが認められる。

一方、東北地方の福島県からはNo.52 会津大塚山古墳出土の鉄剣(4)にも三つ組で「[・]繁[・]巻[・]き」すると報告例がある。

なお、この三つ組巻きの仕様は後掲の鞘巻きにも使われている。

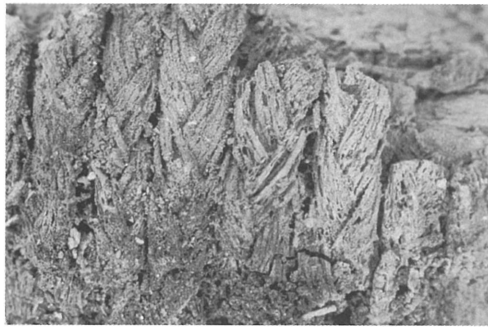


図7 三つ組巻き
(蛇行鉄剣柄残片：築池第15号横穴墓出土)

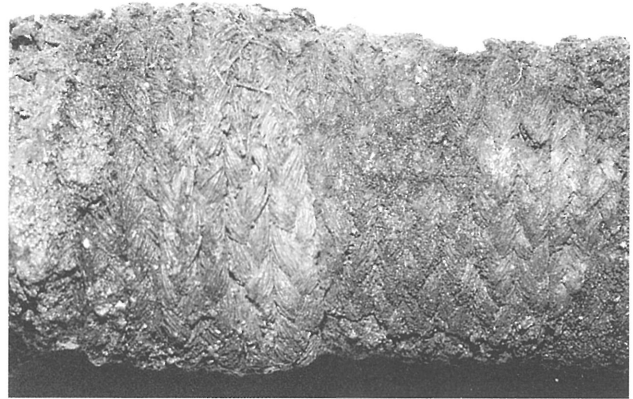


図8 三つ組巻き(蛇行鉄剣柄残片：築池第8号横穴墓出土)

(4) 二本芯並列コイル状二重構造糸巻き (No.53～No.104)

格段に多くみられた仕様として、二本芯並列コイル状二重構造糸巻き(以下、二本芯並列二重構造糸巻き)と呼んでいる手法⁷がある。これは2本の芯糸(出土品の多くは、その部分がほとんど空洞になっていた)に別の繊維(植物繊維か)を横八の字に巻き付け、さらに全体を巻いて1本の糸のようにしている。したがって、表面からみると1本の糸に見える(図9)が、亀裂部分から横断面をみると2本の空洞部分が並列しているのが確認できる(図10)。なお、普通の糸巻きは表面の繊維の方向が柄の長軸に対してほぼ直角になるが、二本芯並列二重構造糸巻きは長軸に対して平行になるのが特徴である。この手法については藤田淳氏の論文⁸と細川晋太郎氏の論文⁹に同様

7 「二本芯並列コイル状二重構造糸巻き」とは、二本の芯糸の周りに別の繊維を横八の字に巻き付け、さらに全体を巻いて1本の糸にしていることから、註1の論文でこの名称を用いることにした。

8 藤田淳「第6節 金属製品に遺存する有機質遺物について」(『朝来郡和田山町所在向山古墳群市条寺古墳群一乗寺経塚矢別遺跡』1999年、兵庫県教育委員会)。

9 細川晋太郎「古墳時代中期の鉄剣と鉄刀の構造—朱金塚古墳南柳出土刀剣の観察—」(『古文化談叢』2007年、九州古文化研究会)。

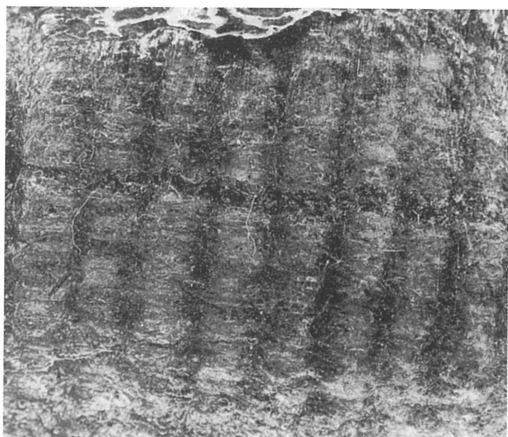


図9 二本芯並列コイル状二重構造糸巻き 表面



図10 二本芯並列コイル状二重構造糸巻き 断面

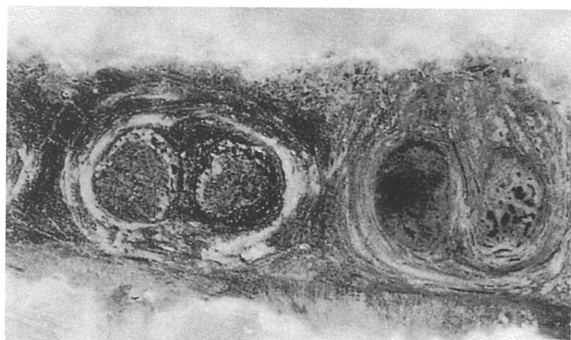


図11 二本芯並列二重構造同糸巻き 断面

藤田淳「第6節 金属製品に遺存する有機質遺物について」(『朝来郡和田山町所在向山古墳群市条寺古墳群一乗寺経塚矢別遺跡』1999年、兵庫県教育委員会)より転載

な仕様が掲載されている。このうち藤田氏の論考によると、刀剣類の柄巻き紐は、「1本の紐に2個一対の空洞が生じており、紐の表面には横方向の筋が無数にみられる」と説明されている。そして「分析の結果、約1000本の絹糸から成る束を2本用意し、それを芯にして周囲に別の繊維を巻き付けて太さ0.15cmの1本にまとめた二重構造で、外巻き繊維は、内側ではたすきをかけるように巻き、さらに全体に巡らせて固定するという方法が推定できる」と報告されている。さらに、同『報告書』には、柄巻き糸の断面拡大写真(図11)等が掲載されて

いる。

この二本芯並列二重構造糸巻きであるが、九州地方から山陰、関西、関東地方においてかなり広範囲に出土しており、51例ほど確認している。このうち宮崎県下においては出土遺物を悉皆調査した¹⁰こともあり、25例あまり発見された。

宮崎県下出土の鉄刀・鉄剣の二本芯並列二重構造糸巻きは、1cm間の巻き密度が、少ないもので5本前後(No.61 切畑地下式横穴2号出土の鉄剣)、多いものでは10本前後(No.62 灰塚地下式横穴墓出土の鉄刀)で、おおむね6～7本程度のものが多かった。藤田氏の報告では、1本の糸の太さは約0.15cmとあることから、宮崎県下出土の鉄刀・鉄剣の柄巻き糸の平均値とほぼ同じである。

二本芯並列二重構造糸巻きの芯に絹糸を用いたのは、麻などの植物繊維は短繊維で、撚りをか

10 沢田むつ代・古谷毅・犬木努「宮崎県内遺跡出土の繊維製品の調査」〈①文部省科学研究費補助金・基盤研究(A)(2)「日本出土原始古代繊維製品の集成及び基礎的研究」(平成10年度～平成13年度)研究代表者東京国立博物館学芸部主席研究員松浦有一郎〉。

沢田むつ代・古谷毅・犬木努「宮崎県内遺跡出土の繊維製品の調査」〈②科学研究費補助金・基盤研究(A)(2)「日本出土原始古代繊維製品の分析調査による発展的研究」(平成14年度～平成17年度)研究代表者東京国立博物館文化財部上席研究員望月幹夫〉。

なお、調査箇所は宮崎県埋蔵文化財センター、宮崎県立総合博物館、宮崎県立西都原資料館、宮崎県立西都原考古博物館に収蔵されている遺物について行なった。

けることで繊維を長くするが、繭から引き出される絹糸は1本が非常に長い長繊維（1個の繭から約1km程度の糸がとれる）であることから、これを束ねて別な植物繊維の糸を巻き付けることで、糸の太さと強度が得られ、巻き糸の伸びの軽減に繋がるものと推察される。外側の植物繊維については、藤田氏の報告書では繊維の種類の分析結果は得られなかったとあるが、同様な構造をもつとされる柄巻き紐について、布目順郎氏はNo.85 福岡県・勝浦41号墳出土の鉄刀に施された外側の繊維について、麻の一種ではないかと述べておられる¹¹。また、同氏の別な報告では、大麻様としており、巻き密度は1.0cmに20本とある¹²が、図版に記入されたスケールで換算すると、約7本程度になると推察される。いずれにしても、0.15cm程度の糸で、しかも絹と植物繊維の二重構造であれば、糸の伸縮率も少なく柄木の緊縛に適していたであろう。さらに、外側を植物繊維でコイル状に巻き付けてあることは、手触りからして滑り止めの効果も得られたことと想像する。同じくNo.73 宮崎県・島内地下式横穴墓出土の鉄剣（23号出土）とNo.74 鉄剣（25号出土）、No.75 鉄剣（41号出土）、No.76 鉄刀（83号出土）、さらにNo.77 鉄剣（85号出土）にも、図版から二本芯並列二重構造糸巻きと推察される柄巻きが認められる。

つぎに、福岡県では、塚堂古墳からは4例報告されており、No.78 鹿角装鉄刀（18）とNo.80 鹿角装鉄刀（20）、No.81 鹿角装鉄刀（21）、そしてNo.79 鉄刀（19）の柄巻きも、図版と、紐の径が0.16cmということから、同じ仕様の柄巻きと推測されるが、報告書ではNo.78～No.80は「葛巻き」、No.81は「繁巻き」と記述されている。同じく同県の番塚古墳からは3例がみられ、No.82 鹿角装鉄刀（鉄刀1）の柄巻きにも、図版から同様な仕様と推測される。ここでは「緒を葛巻き」とある。さらに、No.83 鹿角装鉄刀（鉄刀2）とNo.84 鹿角装鉄刀（鉄刀3）の柄巻きは、図版と、巻き密度が1cm間に7～8本とあるので、これまでの柄巻き仕様例とほぼ同様である。同じく同県のNo.85 勝浦41号墳出土の鉄刀は、前述したとおり、布目氏の報告書の記載と図版から、正しく同じ仕様の柄巻きである。ちなみに、ここでは「千段巻き」と記述されている。

No.86 福岡県・宮司井出ノ上古墳出土の鉄刀の柄巻きであるが、図版をみると同様な柄巻きにみえる。さらに報告書の記述では、「断面円形で径0.1cm前後の現状は中空となっているもの2個をおそらく生糸と思われる非常に細い繊維で巻いたものを1本の単位としたもので、柄木を丁寧に巻いている。いわゆる〈葛巻き〉といわれるものである」と記されている。記述内容から、二本芯並列二重構造糸巻きに相当するが、報告書では上記のように「いわゆる葛巻き」と記述されている。考古の報告書にはしばしば柄巻きなどに「葛巻きされている」という記述がみられるが、こうした記述の柄巻きすべてが二本芯並列コイル状糸巻きを意味しているとは思われない。また、前述したNo.85 勝浦41号墳出土の鉄刀について布目氏の報告書では、「千段巻き」と呼んでいる。同じ仕様の柄巻きでありながら、研究者によって名称が異なるのは、いささか問題があるのではないか。やはり、だれもが同じ認識を得られる適切な名称をつける必要があることを痛感した。

同様な柄巻きは、九州地方だけではなく山陰と関西、関東にも認められた。山陰ではNo.87 鳥取県・宮内遺跡（第5遺跡2号墳石棺内）より検出された鉄刀に施されている。報告書の記述では、「芯（おそらく2本と推測される）の周囲に別の繊維（材質不明）を巻き付けて1本にまとめた二重構造と推測される」とあるので、記述内容から二本芯並列二重構造糸巻きに相当することがわかる。なお、図版でもこの仕様の特徴が明瞭にうかがえる。

11 布目順郎「勝浦41号墳出土の繊維製品について」（『若宮宮田工業団地関係埋蔵文化財調査報告第2集』1980年、福岡県教育委員会）。

12 布目順郎『目で見える繊維の考古学繊維遺物資料集成』（1992年、染織と生活社）。

兵庫県では No.88 向山 5 号墳出土の鉄刀 (T4) は、1 本の幅が 0.2cm、No.89 鹿角装鉄刀 (T5) では、0.15cm を測り、前掲の藤田氏が論考で報告されているように、「芯は絹糸 (1000 本) の束を 2 本用意し、その周囲に別の繊維 (材質不明) を巻き付けて太さ 0.15cm の 1 本にまとめた二重構造。外巻き繊維は、内側ではたすきを掛けるように巻き、さらに全体にめぐらせて固定する」と述べられた通りである。また、No.90 向山 10 号墳出土の鉄短剣 (T30) も 1 本の幅が 0.15cm で、同様な仕様である。さらに、No.91 市条寺 1 号墳出土の鹿角装鉄剣では、1 本の幅が 0.2cm でやや太い仕様となる。さらに、No.92 塚ノ山 1 号墳の鉄刀 (M1) と No.93 鉄刀 (M2) にも認められ、ともに 1 本の幅が 0.2cm である。

大阪府では No.94 珠金塚古墳出土の鉄剣 1 と No.95 鉄剣 2、No.96 鉄刀 1 にも同様な仕様を施した柄巻きが前掲の細川氏の報告書 (註 9 参照) に掲載されている。同じく同府の No.97 高井田山古墳出土の鉄刀 (3) にもみられ、1 本の幅は 0.2cm とある。No.88 をはじめ、No.91 ～ No.93 と同じ幅である。

奈良県では No.98 坂ノ山古墳群出土の鉄刀は、図版から同様な仕様の柄巻きと推測される。なお、この鉄刀には木鞘が遺存しているが、鞘巻きについては記述がない。

ところで、二本芯並列二重構造糸巻きは、管見では中部・北陸地方の古墳からは報告されていないようである。

一方、関東地方の古墳からは埼玉県と茨城県の二箇所から報告されている。埼玉県では No.99 ～ No.102 稲荷山古墳 (第 1 主体部) 出土で、図版では同様な仕様になる鉄刀が 4 例と柄巻きの痕跡があるものが 1 例報告されている。No.99 鉄刀 (1) は「糸幅が 0.2cm 程度の柄巻き」とあり、No.100 鉄刀 (2) は「糸幅が 0.15cm」、No.101 鉄刀 (3) が「糸幅 0.15 ～ 0.2cm 前後に撚られた糸で柄巻き」、そして No.102 鉄刀 (5) は柄部分に「0.1cm 程度に撚られた糸で柄巻きする」と記されているが、これまでの二本芯並列二重構造糸巻きの糸幅とほぼ同じであり、図版からこの糸巻きと推定した。

茨城県では No.103 三味塚古墳出土の鹿角装鉄刀は、巻き密度が 1cm 間に 8 本前後、No.104 鹿角装鉄剣は 0.8cm 間に 5 本とあるので、1cm に換算すると 6 本強となる。No.104 の拡大写真をみると、正しく二本芯並列二重構造糸巻きであることが確認できた。なお、これら 2 本とも宮崎県下などでみられた巻き密度とほぼ同様である。

なお、東北地方では二本芯並列二重構造糸巻きは管見によると報告されていないようであるが、この仕様が認識されていないこともあるであろう。

(5) 平紐巻き (No.105～No.111)

平紐巻きであるが、平紐とあるだけで、後掲の鞘巻きで述べる絹糸を用いた平織物の平絹や植物繊維の麻などで平織にした麻布を、带状に裁断した帯紐を用いたものであるのか記述されていない。なお、これらについては実見していないので、図版や鞘巻きの項で実見した平絹による帯紐巻き等を参考にして述べる。No.105 熊本県・向野田古墳出土の鉄刀 (1) は幅 0.4 ～ 0.7cm の平紐で柄頭から巻いている (図 12)。No.106 鉄刀 (2) と No.107 鉄刀 (4) は、単に「平紐を巻く」と記述されている。図版によると、帯紐状の裂を少しずつずらせながら巻いているようである。なお、1 枚の裂に張りが見られることから、漆のようなものを塗布しているものと想像する。

また、No.108 京都府・椿井大塚山古墳出土の鉄刀には、「柄木の上に幅 0.6cm の絹の平紐を巻き、その上に朱が付着している」と報告されている。

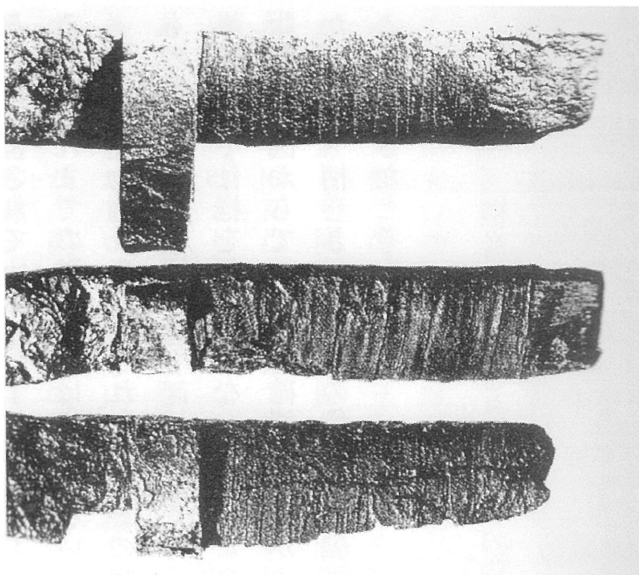


図 12 平紐巻き

(鉄刀：『向野田古墳宇土市埋蔵文化財調査報告書』
第2集、1978年、熊本県宇土市教育委員会より転載)

ある程度の幅に裁断した裂をかなりダブらせながら巻いていき、表面にあらわれている部分の幅を記したものと想像する。

一方、東北地方からは No.109 福島県・会津大塚山古墳出土の鉄剣(6)は「幅 0.7cm の布を巻き、上に漆を塗布」している。また、同古墳出土の No.110 鉄刀では、「幅 1.0cm の布を巻き、上を漆で固めている」と報告されている。同県の No.111 大安場古墳から出土した鉄刀には柄部と鞘部の両方に布巻が施されている。柄部は「幅 1.7cm の布帯紐を柄頭から巻いたあとで表面に黒漆のような樹脂を塗布している」と記述されている。

ところで、平紐であるが、幅が 0.4～0.7cm とか、1.7cm というようになり狭い。これらは平絹とか麻布が用いられているので、この幅に裁断した裂では糸がほつれて紐としての態をなさない。おそらく、

(6) 2種類併用巻き (No.112～No.118)

つぎに2種類の仕様を併用して用いている例がある。下層は二本芯並列二重構造糸巻きを隙間なく巻き、上層には櫛状に糸巻きを施した大変装飾性を意識したような仕様である。

近年、宮崎県えびの市から No.112 島内地下式横穴墓出土の龍文銀象嵌大刀(図 13)にこの仕様が行なわれており、刀身基部両面に龍文と日輪を銀象嵌した(14、15)華麗な大刀が報告され¹³、新聞紙上を賑わせた。本大刀は上記のように下層の下巻きに二本芯並列二重構造糸巻きを施し、上層の上巻きには細い糸巻きを櫛状に巻いている(図 16)。なお、二本芯並列二重構造糸巻きの糸幅が 0.13～0.14cm で、巻き密度は 1cm 間に 7 本を数える。上巻きは S 撚りと Z 撚りの異なる撚糸を揃えて 1 本(糸の幅は 0.13～0.15cm 程度)のようにした糸で約 60 度前後の角度をつけて 11 回ほど巻き、間をあげながら端近くまで巻いたのち、再度逆方向に巻き戻ったものと推定された。なお、撚りの異なる糸を用いて柄巻きした例は、No.39 経僧塚古墳出土の銀装圭頭大刀(鉄刀 2)と No.40 金鈴塚古墳出土の金銅装圭頭大刀(大刀 8)、No.41 金銅装圭頭大刀にみられ、ともに圭頭大刀である点が注意される。

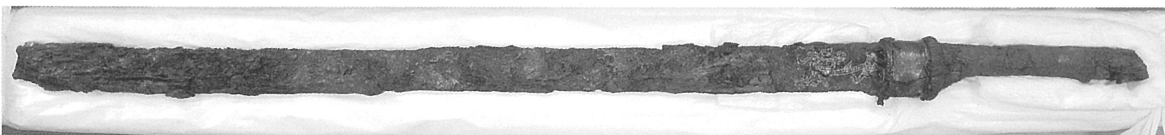


図 13 龍文銀象嵌大刀(島内地下式横穴墓出土)

13 沢田むつ代「島内地下式横穴墓より出土した遺物に付着する繊維等について」(『島内地下式横穴墓群Ⅳ』、2012年、宮崎県えびの市教育委員会)。



図 14 銀象嵌・龍文部分 (同)



図 15 銀象嵌・龍文部分 (同)



図 16 2種類併用巻き (島内地下式横穴墓出土) スケール 1 目盛 0.1cm

同様な仕様は No.113 奈良県・藤ノ木古墳出土の鉄刀 3 にもみられる。二本芯並列二重構造糸巻きと推測される糸巻きの上に、「杉綾状の紐」を巻くとあるが、上記島内地下式横穴墓出土の大刀と同じように、細紐を襷状に巻いたものと推測される。また、No.114 同県・新沢千塚 262 号出土の振り環頭大刀にも同様な仕様がみられる。

大阪府では No.115 ～ No.118 峯ヶ塚古墳出土の鉄刀 1・3・4・9 の 4 振りにも同じ仕様がみられる。この仕様の復元図も報告書に掲載¹⁴ されている。

古墳出土品の繊維類は、ほとんど色がわからなくなっているが、この二本芯並列二重構造糸巻きの上に、さらに襷状に糸あるいは紐を巻く仕様は、大変装飾を意識しているように想像される。しかし、二本芯並列二重構造糸巻きと撚りの異なる糸を揃えて巻く糸は、島内地下式の大刀においてはともに植物繊維が用いられていることから、植物繊維本来の自然のままの色であったものかもしれない。というのは、飛鳥・奈良時代の染織品（上代裂と呼ぶ）にあっても植物繊維を染色している例はほとんどみられないからである。

14 吉澤則男「5. 武器 (2) 大刀について」復元図 161 頁 (『史跡古市古墳群 峯ヶ塚古墳後円部発掘調査報告書』、2002 年、羽曳野市教育委員会)。

つぎに鞘巻きについてみていくことにしよう。

2 鞘巻き (No.119～No.151)

(1) 蔓巻き (No.119～No.120)

植物の蔓をそのまま鞘巻きに用いている例がある。No.119 愛媛県・片山 4 号墳出土の鉄刀には、藤の蔓を隙間無く「葛巻き」すると報告されている。なお、「鞘口から 20.0cm 切先寄りでは、2 本の蔓を束ねて左にねじりを加えつつ鞘口まで巻き付ける」と記述されている。また、No.120 茨城県・磯崎東古墳第 2 号墳より出土した鉄刀は、「植物の蔓を隙間無く巻き付ける」とあり、蔓の太さは太細まちまちであるが、実測図からみるとおおむね 1.0cm 間に 6～7 本程度と推察される。両鉄刀とも、いかにも周りの自然に生じているものを使用したようで興味深い。

ところで、鉄刀・鉄剣には柄部だけではなく鞘部にも樹皮や組紐、平紐と呼ばれている紐、平絹の帯紐を巻きつける例の一部を実見しているのも、『報告書』記載のものと併せて、以下、それらについて述べることにする。

(2) 樹皮巻き (No.121～No.126)

樹皮巻き例として、宮崎県下では 5 例ほどある。No.121 小木原 2002 号地下式横穴墓出土の鉄剣は、鞘木に樹皮を一方の端をごくわずかずつ重ねて少しずつずらせながら巻いている (図 17)。表面にあらわれている樹皮幅は 0.5～0.7cm 程度で、1 枚の樹皮幅は 1.0cm 前後と推測される。同じく No.122 小木原 2014 号地下式横穴墓出土の鉄剣は、これも樹皮を少しずつずらせながら巻いている。さらに No.123 出土地は不明であるが、鉄刀は同じく樹皮を少しずつずらせながら巻いており、表面にあらわれている幅は 0.2～0.5cm と広狭がみられる (図 18)。No.124 築池地下式横穴墓出土の鉄剣は幅 2.0cm の樹皮状のもので巻くとある。さらに、No.125 国富町川上地下式横穴墓出土の鉄刀は、0.2cm の紐巻きの上を樹皮で巻いている。樹皮の表面にあらわれている幅は 0.6～0.7cm 程度と推測される。

なお、No.126 北海道・恵庭市西島松 5 遺跡 (P15 号墓坑底副葬品 3) 出土の鉄刀は「黒漆で固定した樹皮巻き」と報告されている。



図 17 樹皮巻き
(鉄剣：小木原 2002 号地下式横穴墓出土)



図 18 樹皮巻き (鉄刀：出土地不明)

つぎにやや幅のある組紐を巻きつけた例についてみていくことにする。

(3) 組紐巻き (No.127～No.137)

単純な三つ組は柄巻きでも用いられていたが、同様な三つ組巻きは鞘巻きにも使われており、No.127 大阪府・珠金塚古墳出土の鉄剣 2 には、「幅 0.2cm (『報告書』の図面により判断) の三つ組と思われる組紐をラセン状に巻く」と報告されている。

つぎに、三つ組よりやや幅のある組紐巻きがある。宮崎県下出土の鉄刀と鉄剣には、二条軸一間組と呼ばれる組紐を鞘に巻きつけた例がかなり認められる。No.128 築池 15 号横穴墓出土の鉄刀には、組紐幅 0.7cm の二条軸一間組の組紐を一方の端をごくわずか重ね、やや斜めに角度をつけて巻いている (図 19)。同県の No.129 桃木畑 4 号地下式横穴墓出土の鹿角装鉄剣にも同様の組紐を巻いており、組紐幅はやや太く 1.0cm 前後である (図 20)。同じく同県の No.130 中迫地下式横穴墓出土の鉄刀は、組紐幅 0.9cm 前後で、はじめは組紐を 50 度程度の角度をつけ、中程からは 80～90 度と直角に近い角度で巻き、そのあとは平絹の帯紐で巻いている。組紐の不足でこのように途中から巻きの種類を変えたのであろうか興味深い。組紐の巻きの角度が 90 度近くになるということは、組紐の巻き終わりを示唆するものであろう。このように途中から種類を変えている例はこれまでにみえていない。同じく同県の No.131 馬頭地下式横穴墓出土の鉄刀も二条軸一間組の組紐巻きで、組紐幅は No.128 築池 15 号横穴墓出土の鉄刀に巻かれていたものと同じ 0.7cm 前後。この種の組紐幅は 0.7cm 前後が多い。同県の No.132 大萩地下式横穴墓出土の鉄剣も同様の組紐で、組紐幅は 0.7cm 前後。No.133 同地下式横穴墓出土の鉄剣も同様の仕様で、組紐幅は 1.0cm 前後となり、No.129 桃木畑 4 号と同じである。さらに、No.134 同地下式横穴墓出土の鉄刀も同様の仕様で、組紐幅は 0.7cm 前後。同県の No.135 島内地下式横穴墓群出土の鹿角装鉄剣も、同じく二条軸一間組で、組紐幅はこれまでの同種の組紐で最も多い 0.7cm 前後である。なお、この鹿角装鉄剣には組紐巻きの上に経錦が付着していた。島内地下式横穴墓からは、この他にも同様の仕様になる鉄刀と鉄剣が数本確認されている¹⁵。

この二条軸一間組の組紐巻きは、宮崎県に限ったものではなく、山陰では No.136 鳥取県・長瀬高浜遺跡出土の鉄刀 (F1) にもみられ、この鉄刀では「鞘の上に布を二重以上巻き (一部しか残存しない)、さらにその上に幅 0.9cm の組紐を巻いている」と記述されている。布を固定するために漆等を用いたかどうか報告されていない。

畿内では、No.137 奈良県・寺口忍海古墳群出土の鞘破片にみられ、『報告書』では「幅 0.5cm の綾杉文状の組紐」と記述されているが、二条軸一間組の組紐の文様 (表面・裏面とも山形または V 字状に組織される) からみて、綾杉文は二条軸一間組の組紐と推定される。

この組紐より幅の広いものとして帯紐巻きがある。つぎにこの帯紐巻きについてみていくことにしよう。

(4) 帯紐巻き (No.138～No.151)

柄部や鞘部に平紐を巻く例が報告されているが、平紐とあるだけで組紐の一種か、後掲で述べる絹糸を用いた平織の平絹や植物繊維の麻などで平織にした布を、帯状に裁断した帯紐であるのか記述されていない。唯一、後掲する No.144 鳥取県・縁山 2 号墳の鉄刀については、実物調査を行なっ

15 沢田むつ代「出土遺物に付着した繊維について」(『島内地下式横穴墓』、2001 年、宮崎県えびの市教育委員会)。

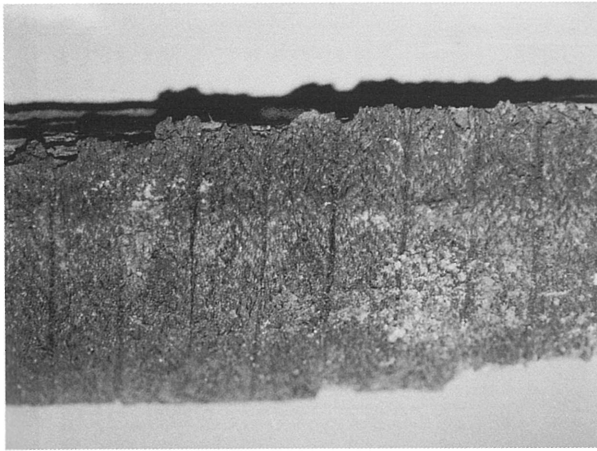


図 19 二条軸一間組
(鉄刀：築池 15 号横穴墓出土)

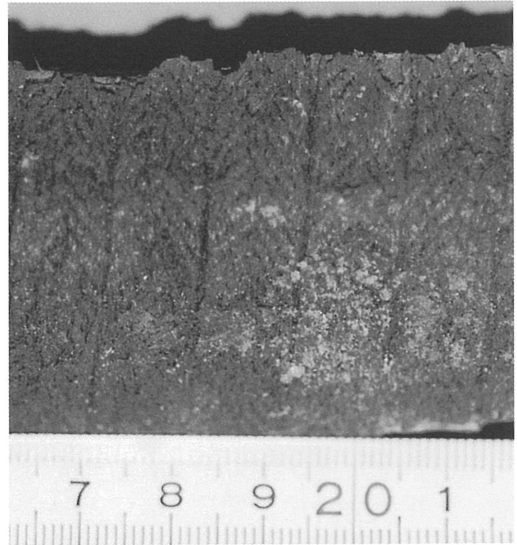


図 20 二条軸一間組
(鹿角装鉄剣：桃木畑 4 号地下式横穴墓出土)

ているので実態を明らかにすることができる。

九州では No.138 宮崎県・築池地下式横穴墓出土の鉄刀は、「幅 0.7cm 前後の平織布で巻く」とある。福岡県では No.139 番塚古墳出土の鹿角装鉄刀(1)にみられ、切先近くでは「幅 0.5～0.8cm の平織布、鞘口の鹿角装具から 4.0cm のところには幅 1.2cm の布を巻き、その部分と鞘口の鹿角装具の間には 0.3cm ほどの組紐らしきものを巻く」と記述されている。同じく No.140 鹿角装鉄刀(2)では、鞘木の上に「幅 0.6～0.8cm の平織布を鞘口側から鞘尻に向かって巻き、鞘口から 45～50cm あたりで背側の巻きが腹側より密になる」と記されている。後掲 No.144 でみられるように、巻き終りを示唆するものか。同県の No.141 塚堂古墳 1・2 号石室から検出された鉄刀(4)は、「鞘部を幅 0.5cm の平紐で巻く」と記述されている。同じく No.142 塚堂古墳出土の鹿角装鉄刀(18)は、「幅 0.8cm 程度の織物の紐を巻く」とある。同じく同県 No.143 セスドノ古墳出土の鹿角装鉄刀(3)は、「鞘部を幅 0.8cm の布で巻いている」。

これらの平紐の幅をみると 1.0cm にも満たないことから、柄巻きの平紐巻きでも述べたが、表面にあらわれている幅を表記したもので、つぎに述べる No.144 鳥取県・縁山 2 号墳のような仕様になっていたものと推測される。

一方、山陰地方では前述した No.144 鳥取県・縁山 2 号墳出土の鉄刀¹⁶は、平絹を 3.5～4.0cm 程度の幅に裁断して帯紐状にしたものを鞘部に巻いている(図 21)。この平絹の織り密度は 1.0cm 間に経糸 24～26 本程度、緯糸は 12 本前後で、やや粗い経地合¹⁷の平絹である。この長い帯紐状に裁断した平絹を、一方は織耳を使い、他方の裁ち目の部分は経糸がほつれてこないようにごくわずかに内側へ折り返して(図 22)、鞘口から鞘尻へ向かって角度をつけて斜めに巻き、つぎに巻く方向を変えて鞘口に向かって斜め 50～60 度程に角度をつけて巻き戻っている。すなわち二度巻きしていることになる。鞘口近くなるにつれて帯紐の表面に出る幅を狭くし、鞘口で収まりよく巻き終わるように調整している(図 23)が、巻き終わりの処理の仕方は確認できなかった。なお、帯

16 この鉄刀は鳥取大学で保管(調査当時)されており、調査は平野芳英氏(当時の所属は出雲風土記の丘資料館)と行ない、調査の所見等の報告は先方へ提出した。

17 経地合とは、一定の範囲内で経糸の本数が緯糸の本数よりかなり多い、経糸の密な織物。

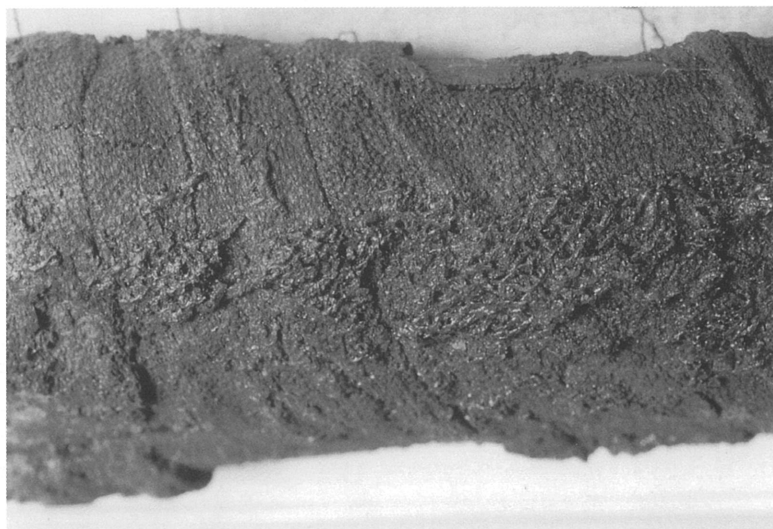


図 21 平絹の帯紐巻き（鉄刀：緑山 2 号墳出土）



図 22 同 部分拡大

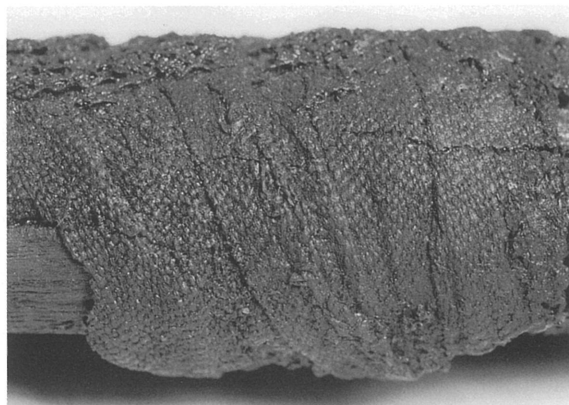


図 23 同 鞘口近くの部分

紐の重なりは広いところで 3.5cm 前後、狭いところでは 0.8cm 前後となる。

関西では、No.145 大阪府・峯ヶ塚古墳出土の鉄刀（3）は平織の布を少しずつらせながら巻いている。No.146 の鉄刀（9）も同様な仕様である。なお、『報告書』にはこの状況が図版（原色図版 27-10）に掲載されている。また、No.147 の鉄刀は「鞘口に近い側で布端が 0.4 ～ 0.5cm 間隔で並んでおり、綾織の可能性がある帯状の紐を巻きつけている」とある。綾織の裂を巻きつけている例は、これまでに報告されていないようである。

奈良県では No.148 藤ノ木古墳出土の鉄刀（3）があり、「幅 0.5cm ほどの細い平絹の帯の端部を重ね合わせながら（端を少しずつらせながら）全体に巻き込んでいる。なお、鞘の下半分は布の表面に朱を塗る。鞘の上半分は鞘と平行に 1.1cm の幅で 6 重以上に平絹を被せ、責め金具のようにして平絹と金銅板の帯で固定する。この帯は 3.6cm ほどで、左右から経錦の細い帯を巻き上げて、その上に 2.4cm ほどの金銅板で固定する」と報告されている。いずれにしても、平絹の帯紐を少しずつらせながら巻いた上に、6 重以上の平絹を被せ、また、経錦の細い帯も使用するという手の込んだ装飾的な仕様になっていることがうかがわれる。貴重な経錦を鞘巻きに用いている例はこれまでに報告されていない。同じく同県 No.149 寺口忍海古墳群の鉄刀は、「幅 0.8cm 程の細い布を巻く」と記述されている。おそらく、これらも平絹の端を少しずつらせながら巻き、表に出ている幅を表記しているものと推察される。

これらの仕様は関東地方からも出土しており、No.150 茨城県・三味塚古墳出土の鉄刀には、「幅約 1.0cm 前後の布を巻く」とある。

また、東北地方では No.151 福島県・大安場古墳出土の鉄刀には、「鞘木の上に樹脂を塗り、幅 2.0cm の細粗 2 種類の布帯紐を継ぎ足して巻き、その上に樹脂を塗る」と記述されている。

以上、これまでの実物調査や刊行された『報告書』の図版等を点検してまとめたものである。これ以外にも記述は多くあるものの、記載が簡単で繊維の種類や仕様を判断できなかった。また、『報告書』に掲載された図版や実測図からでは詳細を確認できなかったものも多々あった。しかし一応、柄巻きと鞘巻きの代表的な繊維の種類と仕様例をあげることができたと考える。

3 柄巻きと鞘巻きの種類の特徴と地域性

鉄刀と鉄剣の柄巻きや鞘巻きに施された種類と仕様は、宮崎県下出土品などの実物調査と、刊行された多くの『報告書』の記述や図版である程度確認することができた。しかし、『報告書』については遺漏も多々あることと思う。また、『報告書』の繊維に関する記述は説明が簡略である点と、拡大写真などの詳細な図版が掲載されていないものが大部分で、十分な情報を得ることができなかったものが多くあった。そこで、これまでの調査結果を基に、『報告書』から得られた情報をあわせ、柄巻きと鞘巻きの特徴と同種の仕様の地域性等についてみていくことにしたい。

まず柄巻きからみていくことにする。鉄刀や鉄剣に用いられる柄木であるが、茎にあたる部分を剥り抜いた 2 枚の板材に茎を挿入して合わせている場合が多い。また、一木で棟側に切り込みを入れるものもある。2 枚の板材は漆等の接着剤で接着されていると想定されるが、より強固にするために柄木の上をこれまでみてきたように繊維を巻きつけている。また、繊維を巻くことで滑り止めの効果も得られたことであろう。

柄巻きに用いられた仕様であるが、糸巻きがかなりの点数に及んだ。特徴ある糸巻きは弥生時代の例として、No.1 福岡県・立岩遺跡出土（以下、No. 番号と県名、遺跡名称、なお、遺跡名称については「遺跡出土」を省略して表記する。以下同じ）の鉄剣がある。この糸巻きは細い絹の S 撚りと Z 撚りの糸を揃えて 1 本のようにして巻いたものと推定した。当時としては貴重な絹糸を用いており、しかも撚り糸として使用する点は、柄巻き用の糸として作られものと考えられる。それというのは、絹糸を用いた織物の場合、経糸と緯糸（よこいと）に撚り糸を用いることはほとんどみられないからである。

撚りの異なる糸を 2 本引き揃えて用いる仕様は、素材が異なるものの、6 世紀後半から末の古墳からも出土している。素材は植物繊維を使用したもので、No.39 千葉県・経僧塚の銀装圭頭大刀（図 4 参照）と No.40・No.41 同県・金鈴塚の金銅装圭頭大刀（図 5 参照）にみられた。前者は 1.0cm 間に 14 本前後を数える。やはり、植物繊維は繊維の性質から絹糸とは異なり、細い糸を作りにくいことにもよるであろう。

古墳時代では、柄部の糸巻きは各地でみられるようになるが、前述のように『報告書』の記述が不明確なものが多い。用語にしても「葛巻き」や「繁巻き」、「千段巻き」とあるが、その実態が明確ではない。このため、糸巻きについては、二本芯並列二重構造糸巻きや組紐巻き、帯紐巻きのように特徴的な要素が少ないため、『報告書』に掲載されていても果たしてどれとどれが同じ仕様なのか判別のつかない点が多い。このため、地域性を比較することはできにくいといわざるをえない。糸巻きの素材として使われる繊維の大部分は植物繊維ということもあり、素材の性質から長い糸を作る場合、糸に撚りをかける必要が生じる。S 撚りもあれば Z 撚りもみられ、撚りの違いで製

作地を見極めることは無理があるといえよう。なお、No.11 宮崎県・灰ヶ野の鉄刀（図1・2参照）に巻かれていた糸巻きのように、2本の片撚りの糸を撚り合わせて1本の糸にしている例もあり、巻き密度は1.0cm間5～6本程度で、やや太めの糸巻きとなる。このほかに、糸巻きで糸幅や糸の巻き密度がわかる例を挙げると、1本の幅が0.1cm程度の糸巻きはNo.5 福岡県・セスドノの鉄刀とNo.10 宮崎県・大萩の鉄刀で、大萩の巻き密度は1.0cm間に10本前後、また、No.13 築池の鉄剣とNo.18 熊本県・向野田の鉄剣は、1.0cmの巻き密度が12本、このほかにもNo.21 島根県・足子谷の鉄刀、No.23 広島県・空長の鉄剣等があった。

つぎに糸幅0.2cm程度のものは、No.22 島根県・連行の銀装圭頭鉄刀をはじめ、No.24 広島県・空長の鉄刀、No.27 兵庫県・中村の鹿角装鉄刀、同県のNo.28 柿坪中山の鉄剣等があり、これらの多くは紐または紐状のものなどと記されているが、これが組紐のようなものか単に太さのある撚糸なのか判然としないところがある。太さからみて、なかには単糸ではなく2本の糸を撚って諸撚りにしたものもあるのではないだろうか。これらのほかに、No.38 千葉県・経僧塚の鉄刀は、1本が0.05cmで、1.0cm間の巻き密度は16本前後となるものもあった。

これらの糸巻きは植物繊維で、比較的容易に入手することができるため、どの地方でも使われたことがわかる。なお、糸巻きのなかには上から漆を塗布して固定するものが、各地で確認されている。この仕様は、糸の伸びを防止して、緊縛をより強固にするために行なわれたものであろう。

以上あげた以外でも、鉄刀と鉄剣の柄巻きには、おそらく撚糸等による糸巻きが、詳細な報告はないものの各地にあったものと想像する。このため特定の地域に限って行なわれた仕様とは考えにくい。

つぎに糸巻きより幅のあるものとして、樹皮や三つ組の組紐、宮崎県下で一番多く使われた二本芯並列二重構造糸巻きがある。樹皮巻きも、身近に手に入る素材であるため、よく使われたものと推測されるが、宮崎県以外ではあまり報告例がみあたらない。宮崎県では2例、三重県で1例確認している。なお、この仕様は鉄族の柄巻きにも頻繁に用いられている。やはり身近にある素材を有効活用したものと考えられる。

三つ組の組紐は、組紐のなかで最も初期的な手法で、しかも植物繊維を用いていることもあり、どこでも使われていたものと推測される。宮崎県から3例、福島県からも1例報告があった。宮崎県ではNo.49 築池第15号の蛇行鉄剣（図7参照）、No.50 築池第8号の同じく蛇行鉄剣柄断片（図8参照）、No.51 九塚2号の鹿角装鉄剣、福島県ではNo.52 会津大塚山の鉄剣に行なわれていた。報告されていないものもあらうと思われるが、あまり地域的に特色を伴う仕様ではないといえる。

一方、二本芯並列二重構造糸巻きは、製作にはある程度の技巧と手間を伴うものの、絹糸や植物繊維の撚糸などと比べ、太さも多少あることから、柄木を効率よく安定して緊縛するのに適した仕様といえる。さらに、この手法は外側に植物繊維を巻いており、繊維の方向も柄木の長軸に対して平行になることで触感の良さと滑り止めの効果もかねていたと考えられた。二本芯並列二重構造糸巻きは芯に絹糸を束ね、その上を植物繊維で巻く作業は、ある程度の熟練を要としたことであろう。

この糸巻きはおおむね1.0cm間に6～7本程度のものが多く、No.61 宮崎県・切畑2号の鉄刀は5本くらいでやや太いものもあれば、No.62 灰塚の鉄刀は10本とやや細いものもみられた。なお、No.83・No.84 福岡県・番塚の鹿角装鉄刀は7～8本。関東地方ではNo.103 三味塚の鹿角装鉄刀は8本前後と報告されていた。したがって、太くても1本の幅が0.2cm以下でそれ以上太いものは報告されていないことから、1本の太さにはある程度限界があったものかもしれない。

この糸巻きの仕様が、九州地方のみならず、近畿地方と関東地方にも認められ、こうした技術の伝播があったものか、製品として伝えられたものなのか、即断はできないが、ある程度技術を習得

することで各地で作ることも可能ではないだろうか、今後の多方面での資料の増加を期待したい。

ところで、この二本芯並列二重構造糸巻きで下層を巻いたうえに、上層には襷状に糸巻きを施した大変装飾性を意識したような仕様がNo.112 宮崎県・島内の龍文銀象嵌大刀(図16参照)をはじめ、No.113 奈良県・藤ノ木の鉄刀3、No.114 同県・新沢千塚262号墳の振り環頭大刀、No.115～No.118 大阪府・峯ヶ塚の鉄刀3点と大刀に1点認められた。島内は5～6世紀、新沢千塚と峯ヶ塚は6世紀初頭～前半、藤ノ木は6世紀後半以降のものと考えられている。島内の銀象嵌大刀は上層にS撚りとZ撚りの異なる撚糸を揃えて1本のようにした糸を使用している。藤ノ木では綾杉状の紐、峯ヶ塚では幅の細い平組紐状の紐を巻くと記されている。いずれにしても、島内の例からみて、下巻き上巻きとも植物繊維が用いられていたものと推測される。古墳出土のものはほとんど色彩が確認できないが、植物繊維は染め付きも悪いことから、上巻きを襷に巻く仕様は装飾的ではあるものの、色彩は植物繊維のままの自然色であったと推定した。

一方、鞘巻きの仕様であるが、鞘木にあっても同様に、2枚の板材を合わせて漆等で接着し、柄巻き同様、繊維等を用いて緊縛したことがうかがわれた。柄より巻く範囲が広がるため、細い糸巻きより幅のある樹皮巻き、植物繊維の三つ組の組紐、これまでにない絹糸を用いて二条軸一間組という技法で組んだ組紐がみられた。さらに平絹や布を一定の幅に裁断した帯紐巻きが用いられていた。なかには自然にある藤の蔓を巻き付けた例が、No.119 愛媛県・片山4号の鉄刀とNo.120 茨城県・磯崎東の鉄刀にみられた。自然から採集できる藤の蔓は強靱で、縄などにも使用され、身近にある素材を有効に活用していた。

樹皮巻きは柄巻きでもみられたが、鞘巻きとして使われている例が宮崎県下で4例認められ、このうちNo.125 国富町川上の鉄刀は、表面にあらわれている樹皮の幅が0.6～0.7cm、また、No.121 小木原2002号の鉄剣もほぼ同様(1枚の幅は1.0cm)(図17参照)である。この樹皮を少しずつずらせながら巻いており、表面では0.5～0.7cmの幅であらわれていることから、樹皮の重なりは少ないところで0.3cm、多いところでは0.5cmとほぼ半分程度重ねて巻いていることが確認できた。北海道でもNo.126 西島松5の鉄刀でもこの仕様がみられ、巻いた上を黒漆で固定していた。漆を塗って固定することにより、巻きのずれが無くなって安定した状態で強固に緊縛することができたであろう。

柄巻きに用いられた三つ組もNo.127 大阪府・珠金塚の鉄剣に施されており、組紐の幅は0.2cmと細い。

つぎに、宮崎県下で多くみられた鞘巻きとして、三つ組より組糸の本数を多くした、技術をとまなう二条軸一間組による組紐巻きが散見された(No.127(図19参照)～No.137)。この組紐は、絹糸が用いられていることもあり、複数の色系(絹糸は麻糸よりはるかに染まりが良好である)を使うことで装飾効果も得られたことと想像する。表面は山形またはV字形の文様があらわれるもので、幅は0.7～1.0cm程度のものが使われていた。この組紐は宮崎県以外では山陰地方のNo.136 鳥取県・長瀬高浜1号墳の鉄刀にみられた。また、近畿地方ではNo.137 奈良県・寺口忍海の鞘破片に認められた。

ところで二条軸一間組であるが、奈良県・法隆寺から皇室へ献納され、後に国有となった「法隆寺献納宝物」の染織で仕立てられた幡¹⁸の幡頭部と呼ばれるところに、4.5cm前後の幅からなる同組織の組紐(図24)が用いられている¹⁹。この幡は7世紀後半～8世紀前半頃の製作で、さまざま

18 幡とは仏堂の内外を飾る荘厳具の一つで、人体を象ったごとく頭に当たる幡頭、胴に相当する幡身、足となる幡足からなっている。

19 東京国立博物館編『法隆寺献納宝物染織I―幡・褥―』1986年、便利堂。

まな色に染めた絹の色糸が使われていることもあり、華やかである。古墳出土の二条軸一間組も幅は狭いものの、複数の色糸を使って組むことにより、鞘巻きとしての実用性もさることながら、いっそう豪華さも増したことであろう。

組紐よりさらに幅のある平絹や布の織物を、一定の幅に裁断して帯紐にし、これを鞘に巻く仕様も九州地方をはじめ、山陰、近畿、関東、そして東北の各地でみられた。これは織物があれば、帯紐の幅を自由に決めることができる。しかし、あまり細い幅の帯紐では、裁断した織物を鞘に巻き付ける際に、糸がほつれてきて不具合を生じる。このため、No.144 鳥取県・縁山2号の鉄刀（図21～23参照）のように、一方の端は織物の端である織耳を使っている。織耳部分は経糸のほつれもないことから、他方の裁断部分を少し裏側へ折り返して巻いていけば、糸がほつれてくることも少ない。この鉄刀の帯紐は幅が3.5～4.0cmであることから、三つ組や二条軸一間組の組紐より効率よく巻くことができ、能率もあがったことであろう。この頃（4世紀後半以降）になると、平絹も各地で織られていた事と推察される。

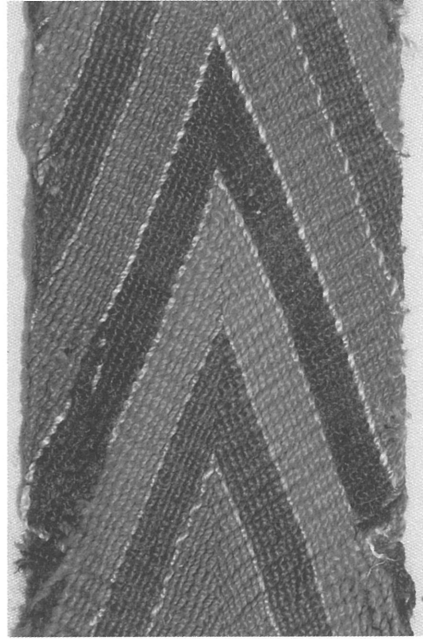


図24 二条軸一間組（幡の幡頭部、法隆寺献納宝物・東京国立博物館）

なお、No.145～No.147 大阪府・峯ヶ塚の鉄刀をはじめ、No.148 奈良県・藤ノ木の鉄刀、同県のNo.149 寺口忍海の鉄刀、No.150 茨城県・三昧塚の鉄刀の多くが幅0.5～1.0cm程度の平織の布や平絹の細い帯を少しずつずらせながら巻くと記されているが、前述のごとく表面にあらわれている部分の幅を記述したものと推定した。なお、この幅に裁断された平絹や布では、裁断した時点で糸がほつれてくるからである。

なお、No.151 福島県・大安場の鉄刀では布幅2.0cmとあり、この帯紐の上に樹脂を塗布して固定したようであった。このように幅の狭い帯紐にあつては、記述されてはいないが、糸がほつれてこないように漆などの樹脂を塗布して固めていたことが推測された。あるいは、裁断して帯紐にした時点で、糸のほつれを防止するために何らかの方法で処理を施して巻いた可能性も考えられる。

まとめ

以上、古墳出土の鉄刀と鉄剣に施された柄巻きと鞘巻きの繊維の種類と仕様についてみてきた。

繰り返しになるが、柄巻きと鞘巻きの目的は柄木および鞘木を強固に緊縛することが主な用途であるが、柄部は鞘部より巻く長さが短いこともあり、概して植物繊維の糸巻きが各時期を通じて各地でみられた。植物繊維の性質上、糸に撚りを施すのは当然のことであるが、単糸もあれば双糸も確認された。巻きの糸の伸びを軽減するために、S撚りとZ撚りの糸を引き揃えて用いた例もあった。この手法はすでに弥生時代から使われていたものの、古墳時代ではあまり例をみないが、『報告書』では多方面で認識されていなかったこともあろう。一番各地みられた仕様は、二本芯並列二重構造糸巻きであった。束ねた絹糸を芯にし、植物繊維を二重に巻きつける手法が各地で散見されたことは、柄木の緊縛に際し、この手法が最適であったことがうかがわれた。1本の幅が1.5～2.0cmで、1.0cm間に6～7本程度、しかも、巻いている間の伸縮が少ないとなれば、この手法

の技術を習得し、各地で用いられたものであろう。

また、二本芯並列二重構造糸巻きの上に、襷状に糸巻き（または平組紐）を施す2種類併用巻きは、多分に装飾性を意識した仕様であると考えられたが、色彩的にはNo.112 宮崎県・島内の龍文銀象嵌大刀にみるごとく植物繊維のままの自然色と推定される。したがって、分析はされていないものの、色彩効果は期待できなかったものと考えられた。

色彩を想定できるのは、鞘巻きに用いられた二条軸一間組であろう。この組紐は絹糸を用いていることもあり、染色しやすく色数を増やすことで法隆寺献納宝物の組紐のように華やかな装飾効果も得られる。この組紐は今のところ関東地方等では確認されていない。

一方、柄巻きと鞘巻きの両方でしばしば使われている仕様に、平織の平絹等を長く裁断して帯紐のようにして巻いた例が各地でみられた。織物の密度がわかっている縁山2号墳でみると、織り密度は細かいほうではなかったもので、こうした用途には上等品の織物を使っていなかったものと推察した。

これまでみてきたように、柄巻きには糸巻きをはじめ、樹皮巻き、組紐巻き、二本芯並列二重構造糸巻き、2種類併用巻き、平紐巻き、布帯巻きといったさまざまな仕様が見いだされ、鞘巻きにおいては、樹皮巻きや組紐巻き、帯紐巻き等が確認できた。今後、新たな仕様の報告を期待したい。

備考 本報告は文部省科学研究費補助金・基盤研究(A)(2)「日本出土原始古代 繊維製品の集成及び基礎的研究」(平成10年度～平成13年度)研究代表者東京国立博物館学芸部主席研究員松浦有一郎、同「日本出土原始古代繊維製品の分析調査による発展的研究」(平成14年度～平成17年度)研究代表者東京国立博物館文化財部上席研究員望月幹夫の研究成果の一部である。

また、科学研究費助成事業・基盤研究(C)「古代東アジア世界における染織品の伝播と使用に関する考古学および美術史学的研究」(平成26年度～平成28年度)研究代表者 沢田むつ代の研究成果の一部である。

謝辞 科学研究費による調査では、特に宮崎県下出土品については、宮崎県埋蔵文化財センター、宮崎県立総合博物館、宮崎県西都原資料館、宮崎県立西都原考古博物館、とりわけ西都原考古博物館では東憲章氏に大変お世話になりました。記して感謝申し上げます。なお、西都原考古博物館での調査は、科学研究費調査メンバーの犬木努氏(大阪大谷大学)、古谷毅氏(東京国立博物館)とともに行ない、ご教示をいただきました。

その後の調査では、宮崎県えびの市教育委員会の中野和浩氏にお世話になりました。また、図版13～16の撮影は三田寛之氏(東京国立博物館)にご協力いただいた。末筆になりましたが、お世話になりました皆様にお礼申し上げます。

鉄刀・鉄剣の柄巻きと鞘巻きの種類と仕様

凡例：名称は報告書等で直刀や大刀と記載されているものは「鉄刀」に統一した

：法量は完存していない場合は（ ）で記した

：備考等の項で、実物調査以外は報告書の記載を引用した

：報告書の項で、調査した遺物については「実物調査」と記し、それ以外は写真等が掲載された報告書名を記した

No.	遺跡所在地	出土遺跡名	名称	付着繊維の部位	繊維の種類と仕様等	法量 ()は現存長さ 単位は cm	備考等	報告書	年代
1	福岡県	立岩遺跡	鉄 剣 (10号薙棺出土)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	剣身寄りでは幅3.6cm、 長4.6cmまで両端0.7cm ばかりのこして細い絹の 燃糸を巻き、柄尻寄りでは 太い糸で巻く	長 (23.0) 身幅 〈柄元〉3.5	細い絹の燃糸はZ燃りとS燃りを 交互に巻く。剣身に平織布付着 (抜身のまま布で巻いていた)	立岩遺蹟調査委員会編『立岩 遺蹟』(1977年、河出書房新 社)、布目順郎『目で見える織 維の考古学』(1992年、染織 と生活社)	弥 生 中期後半 1～2c
2			鉄 剣 (39号薙棺出土)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	柄口から0.7cmを巻き残 している	長 (40.5) 身幅 2.5	剣身は鞘をともなっていない抜 身のまま	立岩遺蹟調査委員会編『立岩 遺蹟』(1977年、河出書房新 社)	
3		門田遺跡	鉄 剣 (24号薙棺出土)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	絹糸を巻く。柄部先端 0.9cmと柄尻2.8cmの部 分には糸巻きはみられな い	長 〈柄長〉 7.4 幅 3.3		『山陽新幹線関係埋蔵文化 財調査報告第9集』(1978年、 福岡県教育委員会)、布目順 郎『目で見える織維の考古学』 (1992年、染織と生活社)	弥 生 中期後半 1～2c
4			鉄 剣	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	絹のZ燃り糸を巻く				
5	セスドノ古墳	セスドノ古墳	鉄 刀(6)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	0.1cm弱の太さの糸で柄 巻する	長 (94.1) 身幅 2.4		『セスドノ古墳』(1984年、田 川市教育委員会)	5c末 6c初
6			鹿角装鉄剣(1)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	糸巻き	長 (77.2) 身幅 3.0			
7			鉄 刀(5)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	太目の糸で巻く	長 (89.9) 身幅 3.0			
8	宮崎県	大萩 地下式横穴墓	鉄 剣 (OH-STC-3-001)	柄部(柄間)	糸巻き(巻き密度1cm間 に8本前後)	長 (64.4) 幅 3.5	柄木や茎に植物繊維と思われる 糸を密に巻く	実物調査	5～6c
9			鉄 剣 (OH-STC-4-002)	柄部(柄間)	糸巻きの上に2本引き揃 えの糸で間隔を開けて (0.6～0.7cm)螺旋状に 巻く	長 (54.2) 幅 3.7			
10			鉄 刀 (OH-ST36-009)	柄部(柄間)	糸巻き(糸幅0.1cm前後、 巻き密度1cm間に10本 前後)	長 (81.5) 幅 4.0			
11			鉄 刀 (HG-013)	柄部(柄間)	S燃りの糸巻き(巻き密 度1cm間に5～6本程 度)	長 (12.0/26.5/6.2/47.2) 幅 4.5			

12	新田場7号 地下式横穴墓	鉄 剣	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	Z燃りの糸巻き	長 (10.7/23.5)				
13	宮 池 築 池 地下式横穴墓	鉄 剣 (ST15-011)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	燃糸巻き(幅0.1cm弱)	長 (20.0)			実物調査 『築池地下式古墳発掘調査』宮 崎県文化財調査報告書 第 21集(1979年、宮崎県教育委 員会)	5～6c
14		鉄 剣	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	細い糸を巻く	長 74.1 身幅(関寄り3.9 中程 3.1)				
15		鉄 刀	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	細い糸を巻く	長 65.6 身幅 2.9				
16		鉄 剣	茎(柄木なし)に巻 く	茎先には太めの2本燃糸 を巻き、茎全体には細目 の2本燃糸を巻く	長 (30.3) 身幅 2.1		剣は意識的に「く」の字に曲げら れている。刃部付け根でほぼ直 角になる。刃部には木質が付着 するため鞘に納められていた		
17	熊 本 県 向野田古墳	鉄 剣 (1)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	糸目のような痕跡と漆を 塗った残片が付着(糸で 繫巻きし、その上に漆を 塗ったか)	長 118.0 身幅 4.2～4.8		剣身は抜身の状態で布に包む	4c末 ～ 5c前半	
18		鉄 剣 (2)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	幅0.1cm弱の糸で繫巻き し、その上に漆を塗る。 0.5cmで6本	長 (36.3) 幅 3.1～3.5				
19		鉄 剣(3) 槍先の可能性あり	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	糸で繫巻きし、その上に 漆を塗る	長 (39.7) 身幅 2.2～2.7		刃部に布の痕跡がある		
20		鉄 剣(4)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	糸で繫巻き	長 (31.0) 身幅 3.3～3.7		刃部に布の痕跡がある		
21	島 根 県 足子谷横穴墓	鉄 刀	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	燃糸巻き(糸幅約0.1cm 前後)	長 (57.2)		柄木の上に燃糸を巻き、その上 に黒漆を塗り、さらに燃糸を巻 く	6c後半 ～ 7c初	
22		銅装圭頭鉄刀	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	幅0.2cm前後の紐状のも のを巻き付ける。いわゆ る葛巻き	長 (71.5) 幅 2.0～2.2		紐状の部分と木質の間に繊維が ある。木柄の上に繊維を巻き、 さらに紐状のもので巻き締めた か		
23	広 島 県 空長古墳群	蛇行鉄剣 (2)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	直径0.05cm～0.1cmの 細糸を繫巻き	長 (37.3) 幅 2.0			5c後半	
24		鉄 刀	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	直径0.2cmの紐を繫巻き	長 94.0cm				
25		銀象嵌鉄刀	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	柄木の上に布を巻き、そ の上から糸で巻き締める	長 (82.1)				
26	赤穂郡西野山 第3号墳	鉄 剣 (剣身形利器)	身部と柄木との接 着部に巻く	燃りのない絹糸を巻き (0.025cmの糸で、1cm 間に35本程度、約10cm の間に巻く)漆で塗り固 める	長 (38.6) 幅 3.5			4c	
27	中村古墳群	鹿角装鉄刀 (第2主体系出土)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	幅0.2cm前後の紐によっ て49回巻かれている	身長 69.5 幅 4.0 柄長 14.5 幅 2.0		木鞘に納める	5c末 ～ 6c初	

糸 巻 き

28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

糸 巻 き

兵庫県	柿坪中山古墳群	鉄 剣 (3号墳石室内より検出)	柄部(柄間)柄木の上に巻く	幅約0.2cmの繊維状のものを巻きつける(二本芯を並列コイル状二重構造糸巻きではない)	長 (41.0) 刃部幅 3.0 柄長 17.7	刃部に布帛片あり	『柿坪中山古墳群―但馬における集団墓の調査―』(1975年、兵庫県山東町教育委員会)	5c前半
	長尾・タイ山古墳群	木装鉄刀 (1)	柄部(柄間)柄木の上に巻く	やや太い糸を巻き、上面に赤色顔料を塗る	長 (105.0) 関部幅 4.0 柄長 17.7		『長尾・タイ山古墳群』(1982年、兵庫県龍野市教育委員会)	5c末 6c前半
	竹ノ内古墳群	鉄 刀 (1、3号墳出土)	柄部(柄間)柄木の上に巻く	柄部の関寄りの位置に燃りのない細い繊維(1cm間に8本)を巻く	長 (61.5) 最大幅 2.6		『竹ノ内古墳群』(200年、八鹿町教育委員会)	7c中頃
		鉄 刀 (2、3号墳出土)	柄部(柄間)柄木の上に巻く	柄部の関よりの位置に燃りのない細い繊維(1cm間に8本)を巻く	長 (44.5) 最大幅 3.4			
大阪府	野中アリ山古墳	鉄 刀	柄部(柄間)柄木の上に巻く	柄木の上に黒漆を塗った後、幅0.25cm～0.3cmの紐をコイル状に一重に巻き並べる	77口あり、全体を通じて長大 最長 112.5 最小 90.3 幅 3.0内外	巻き付けは茎全体にわたって40回ほど巻く。木鞘に納めて埋納	「第5章 野中アリ山古墳」 『河内における古墳の調査』(1964年、大阪大学文学部国史研究室)	5c前半
		鉄 剣	柄部(柄間)柄木の上に巻く	柄木の上に黒漆を塗った後、幅0.2cm弱の紐をコイル状に一重に巻き並べる	最長 82.2 最小 66.5 幅 4.0	ほとんど木鞘に納めて埋納		
京都府	離山古墳 離湖古墳	鉄刀(第1主体部出土)または槍か	柄部(柄間)柄木の上に巻く	糸を格子状に巻き付け、菱形連続幾何学模様を作り出し、その上に漆を塗る	5本復元でできる (柄を有し平峰、短い柄を有し丸峰)	鞘を装着した状態で副葬。柄を有し平峰は柄に紐巻き	『離山古墳・離湖古墳発掘調査概要』(1993年、網野町教育委員会)	5c前半
奈良県	寺口忍海古墳群	鉄 刀 (D-27号墳出土4)または槍か	柄部(柄間)柄木の上に巻く	柄木の上に布を巻き、その上に漆を塗布し、糸のようなもので斜め格子状に文様を施す	長 41.0	鞘の木質を遺す	『寺口忍海古墳群』(1988年、新庄町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所)	5c末 6c初
茨城県	三味塚古墳	鉄 刀	柄部(柄間)柄木の上に巻く	撚糸で葛巻き	長 (108.0) 幅 4.0	遺骸の右側から発見	『三味塚古墳』―茨城県行方郡玉造町所在―(1960年、茨城県教育委員会、吉川弘文館)	6c初頭
		鹿角装鉄剣	柄部(柄間)柄木の上に巻く	糸巻き0.8cmの間に5本	長 (45.0) 幅 3.2	遺骸近くで発見。峰は遺骸の足の方を向く		
千葉県	経僧塚古墳	鉄 刀4	柄部(柄間)柄木の上に巻く	柄木の上にZ燃りの糸で巻く。1本の糸幅は約0.25mm、巻き密度は1cm間に16本前後	長 97.0		実物調査、沢田むつ代「経僧塚古墳出土の繊維等について」(『武者 経僧塚古墳 石棺篇 報告』2010年、早稲田大学 経僧塚古墳発掘調査団編集・刊行、土筆社)	6c末
		銀装圭頭大刀 (鉄刀2)	柄部(柄間)柄木の上に巻く	柄木の上にS燃りとZ燃りの糸を引き揃えて巻く。1本の糸幅は0.5mm、巻き密度は1cm間に14本前後	長 96.3			

40	千葉県	金鈴塚古墳	金銅装圭頭大刀 (大刀8)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	柄木の上にS捻りとZ捻り の糸を引き揃えて巻く	長 77.0 幅 4.5	平絹の上に糸巻き	実物調査、沢田むつ代「原始 古代の織物からみた金鈴塚古 墳出土の金糸と織物等」、『金 鈴塚古墳研究』2015年、木 更津市郷土博物館金のすず)	6c後半
41			金銅装圭頭大刀 (大刀9)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	柄木の上にS捻りとZ捻 りの糸を引き揃えて巻く	長 85.0 幅 3.5			
42			鉄 刀2 (P15墓坑底副葬品3)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	漆で固定した糸巻き	長 (47.1) 刀身元幅 3.4	柄頭は木製黒漆塗り		
43			鉄 刀3 (P15墓坑底副葬品2)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	漆で固定した蔓巻き	長 (45.1) 刀身元幅 4.2	柄頭は木製黒漆塗り		
44	北海道	西島松5遺跡	鉄 刀1 (P11墓坑底副葬品)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	糸巻き、その上に樹皮巻 き(柄頭側)・やや太い紐 巻き(鐔側)	長 48.2 刀身元幅 3.45	柄木一木、棟側に落とし込み	鈴木信「V再々報告の金属 製品」、『恵庭市西島松5遺跡 (4)』北埋調報224集、2006 年、財団法人北海道埋蔵文 化財センター)、『恵庭市 西島 松5遺跡』(北埋調報178集、 2002年、同上)	榛文初頭 7～8c
45			鉄 刀3 (P30墓坑底副葬品2)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	糸巻き (幅は0.1cm未満 の細いものと0.15cmの 太いもの2種類を巻く) の上に樹皮巻き	長 46.9cm 刀身元幅 3.7	柄木は一木で、棟側に落とし込 み。柄頭に細い組紐が付着		
46	宮崎県	旭台 地下式横穴墓	鉄 刀 (4号玄室)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	樹皮様繊維巻き (少しず つずらせながら巻く)	茎長 (11.8) 幅 3.0 切先長 (14.5) 幅 2.5		実物調査	5～6c
47		平松箱式石棺群	鉄 剣 (8)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	樹皮巻き	長 (34.3) 幅 2.8		『平松箱式石棺群』(1984年、 熊本県三角町教育委員会)	5～6c
48	三重県	平田古墳群	円頭鉄刀 (11)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く(外装よ く遺る)	幅0.2cmの樹皮を巻き、 現存54巻き残る	刀身長 (73.1) 身幅 2.7	漆塗りの木鞘に納める	『三重県安芸郡安濃町 平田 古墳群』(1987年、安濃町遺 跡調査会)	6c末
49		築池第15号 横穴墓	蛇行鉄剣 (ST-15-010)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	三つ組	長 (50.0) 刃部幅 3.0 鞘幅 5.0			
50	宮崎県	築池第8号 横穴墓	蛇行鉄剣柄残片 (ST8-001)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	三つ組	柄長 (3.2)		実物調査	5～6c
51		九塚2号 地下式横穴墓	鹿角装鉄剣柄残片 (NK2-001)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	三つ組	長 (11.5)			
52	福島県	会津大塚山古墳	鉄 剣 (4)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	三つ組 (三つ編糸で繋ぎ き)	長 (29.0)		『会津大塚山古墳』(1975年、 学生社)	4c後半
53		築池遺跡	鉄 剣 (TI-001)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	二本芯並列コイル状二重 構造糸巻き (巻き密度1 cm間に6本前後)	長 (74.3) 幅 4.6			5～6c

54	
55	
56	
57	
58	
59	
60	
61	
62	
63	
64	
65	
66	
67	
68	

二本芯並列コイル状二重構造糸巻き

宮崎県

築池地下式	鉄刀 (SW-ST1-001)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	二本芯並列コイル状二重 構造糸巻き(巻き密度1 cm間に6～7本)	長 (20.0/25.0/33.0) 幅 3.5
築池11号 地下式横穴墓	鉄刀柄残片	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	二本芯並列コイル状二重 構造糸巻き	10片以上に折損 柄部長(11.4)
築池19号 横穴墓	鹿角装鉄剣柄残片	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	二本芯並列コイル状二重 構造糸巻き	長 (12.3)
六野原 地下式横穴群	鉄刀 (MB-247)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	二本芯並列コイル状二 重構造糸巻き(巻き密度 1cm間に7本前後)	長 (94.5) 幅 6.8
	鉄刀 (MB-272)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	二本芯並列コイル状二 重構造糸巻き(巻き密度 1cm間に8本前後)	長 (120/26.5/62/47.2) 幅 4.5
	鉄刀 (MB-235)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	二本芯並列コイル状二 重構造糸巻き(巻き密度 1cm間に6～7本)	長 (15.7) 幅 2.4
	鉄刀 (SM-ST4-001)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	二本芯並列コイル状二重 構造糸巻き(巻き密度1cm間に7 本前後)	長 (41.0/34.5/18.2) 幅 4.6cm
塚原(下北方) 地下式	鉄剣 (RH-ST2-001)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	二本芯並列コイル状二重 構造糸巻き(巻き密度 1cm間に5本前後)	長 (48.3) 幅 4.0
灰塚 地下式横穴墓	鉄刀 (HT-ST11-003)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	二本芯並列コイル状二重 構造糸巻き(巻き密度1cm間に10 本前後)	長 (29.2/59.3) 幅 3.8
久見迫 地下式6号	鉄剣 (KMT-ST6-007)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	二本芯並列コイル状二 重構造糸巻き(巻き密度 1cm間に8本前後)	長 (71.5) 幅 4.0
西都原古墳群	鉄刀 (SB-004)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	二本芯並列コイル状二 重構造糸巻き(巻き密度 1cm間に6本前後)	長 (88.0) 幅 3.8
小木原 地下式横穴墓群	鉄刀 (CO-ST101-001)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	二本芯並列コイル状二 重構造糸巻き(巻き密度 1cm間に6本前後)	長 (15.7) 幅 2.4
小木原11号 地下式横穴墓群	鉄刀残欠 (ST2004-005)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	二本芯並列コイル状二重 構造糸巻き	長 (84.0) 〈かなり崩れている〉
本庄 地下式横穴群	鉄剣 (HN-ST22-001)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	二本芯並列コイル状二 重構造糸巻き(巻き密度 1cm間に6本前後)	長 (72.5) 幅 5.0
中迫 地下式横穴墓	鉄剣 (NZ2-003)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	二本芯並列コイル状二重 構造糸巻き	長 (52.5) 〈2片に折損〉 鞘幅 5.0

二本の芯(現状は大部分空洞にな
る)の周りに外巻き繊維をコイル
のように巻き付けて一本の糸に
する。外巻き繊維は、内側では
横八の字に巻き、さらに全体に
巻き込んで固定する

実物調査

5～6c	
5c中葉 } 6c	
5～6c	
5c末～ 6c初	
5～6c	

69	大萩12号 地下式横穴墓	鉄刀柄残片 (OH-12-004)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	二本芯並列コイル状二重 構造糸巻き	長 (6.3)	
70	国富町川上 地下式横穴墓	鉄刀残欠	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	二本芯並列コイル状二重 構造糸巻き	長 (87.0)	
71	立切6号 地下式横穴墓	鉄剣残欠 (T65-007)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	二本芯並列コイル状二重 構造糸巻き	長 (28.5) <2部に分離>	実物調査 5～6c
72	立切4号 地下式横穴墓	鉄剣残欠	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	二本芯並列コイル状二重構 造糸巻き (糸幅0.2cm)	長 (45.0以上) <数片に折損>	

宮崎県

73		鉄 剣 (ST-23出土、 No432)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	二本芯並列コイル状二重 構造糸巻きと思われる	長 (90.6) 刃幅 3.5	二本の芯 (現状は大部分空洞にな る) の周りに外巻き繊維をコイル のように巻き付けて一本の糸に する。外巻き繊維は、内側では 横八の字に巻き、さらに全体に 巻き込んで固定する
74		鉄 剣 (ST-25出土、 No433)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	二本芯並列コイル状二重 構造糸巻きと思われる	長 (81.7) 刃幅 3.5	
75	島内 地下式横穴墓	鉄 剣 (ST-41出土、 No435)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	二本芯並列コイル状二重 構造糸巻きと思われる	長 (73.0) 刃幅 3.3	
76		鉄 刀 (ST-83出土、 No906)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	二本芯並列コイル状二重 構造糸巻きと思われる	長 (95.0) 刃幅 3.7	
77		鉄 剣 (ST-85出土、 No907)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	二本芯並列コイル状二重 構造糸巻きと思われる	長 (70.6) 刃幅 3.6	

二本芯並列コイル状二重構造糸巻き

78		鹿角装鉄刀 (18)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	径0.16cmほどの紐によ る葛巻き	長 (27.0)	二本芯並列コイル状二重構造糸 巻きと思われる。茎尻まで及ぶ。 鐔元の下部に4本の組紐残欠が 鈹着する
79		鉄 刀 (19)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	径0.16cmほどの紐によ る葛巻き	長 (17.1)	
80	塚堂古墳	鹿角装鉄刀 (20)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	径0.16cmほどの紐によ る葛巻き	長 (46.3) 幅 3.4	
81		鹿角装鉄刀 (21)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	径0.16cmほどの紐によ る緊巻き	長 (39.1)	

福岡県

82		鹿角装大刀 (鉄刀1)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	緒 (二本芯並列コイル状 二重構造糸巻きか) を葛 巻き	長 (123.2) 幅 3.8	頭側の一部に2本の組紐を編み だ布のようなものを交差させな がら斜めに巻き付けた痕跡があ る
83	番塚古墳	鹿角装鉄刀 (鉄刀2)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	緒 (二本芯並列コイル状 二重構造糸巻きか) を葛 巻き(巻き密度1cm間に 7～8本)	長 (90.6) 幅 (切先側 3.2、 関開 3.5)	
84		鹿角装鉄刀 (鉄刀3)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	緒 (二本芯並列コイル状 二重構造糸巻きか) を葛 巻き(巻き密度1cm間に 7～8本)	長 (120.8) 身幅 (切先近く) 3.1、(中間) 4.5、 (関開) 3.8	

『番塚古墳—福岡県京都郡刈
田町所在前方後円墳の発掘調
査—』(1993年、九州大学文
学部考古学研究室) 5世紀末
～6世紀初頭

『若宮古墳群Ⅱ—塚堂古墳・
日岡古墳—』(1990年、吉井
町教育委員会)

『島内地下式横穴墓群』(2001
年、宮崎県えびの市教育委員
会)

実物調査
5～6c

85	福岡県	勝浦41号墳	鉄 刀	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	二本芯並列コイル状二重 構造糸巻き	二本芯並列コイル状二重 構造糸巻き	円筒形の物体を2本宛繊維束で もって巻き束ねた紐状物の並列 で、おそらくこの紐状物によっ て大刀の柄を千段巻きにしてあ ったものと思われる。繊維束は 植物製で、麻に似ているが、断 面の大きさは麻に比べ著しく大 きい。判定しがたいが、麻の一 種ともみられる	布目順郎「勝浦41号墳出土の 繊維製品について」(『若宮宮 田工業団地関係埋蔵文化財 調査報告 第2集』1980年、 福岡県教育委員会)	5c後半	
86	福岡県	宮司井手ノ上 古墳	鉄 刀	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	二本芯並列コイル状二重 構造糸巻き(糸幅0.15～ 0.2cm)	二本芯並列コイル状二重構造糸 巻き(「径0.1cm前後の現状は中空 となっており、その2個をおそら く生糸と思われ非常に細かい 繊維で巻いたものを1本の単位 としたもので柄木を丁寧に巻い ている。いわゆる葛巻きといわ れるものである」)	『宮司井手ノ上古墳―福岡県 宗像郡津屋崎町所在古墳の調 査報告―』(1991年、津屋崎 町教育委員会)	5c前半		
87	鳥取県	宮内遺跡 (第5遺跡2号 墳石棺内)	鉄 刀 (F3)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	二本芯並列コイル状二重 構造糸巻き	二本芯並列コイル状二重 構造糸巻き(1本の幅 114.0) 〈柄の一部を含む〉 幅 4.9	芯(おそらく2本と推測される) の周囲に別の繊維(材質不明)を 巻き付けて1本にまとめた二重 構造と推測される	「特論2 宮内遺跡出土刀剣 類の分析」(『宮内第1遺跡・ 宮内第4以西・宮内第5遺 跡・宮内2・63～65号分』 1996年、鳥取県教育文化財 団)	6c後半 ～ 7c	
88	兵庫県	向山5号墳	鉄 刀 (T4)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	二本芯並列コイル状二 重構造糸巻き(1本の幅 0.2cm)	長 (78.7) 刃部幅 6.65	芯は絹糸(約1000本)の束を2本 用意し、その周囲に別の繊維(材 質不明)を巻き付けて1本にまと めた二重構造。外巻き繊維は、 内側では櫛を掛けるように巻き、 さらに全体にめぐらせて固定す る	『向山古墳群・市条寺古墳群・ 一乗寺古墳群・矢別遺跡』 (1999、兵庫県教育委員会)	5～6c初	
89		向山10号墳	鉄 短剣 (T30)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	二本芯並列コイル状二 重構造糸巻き(1本の幅 0.15cm)	長 39.2 刃部幅 5.8				
90		市条寺1号墳	鹿角装鉄剣 (T78)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	二本芯並列コイル状二 重構造糸巻き(1本の幅 0.15cm)	長 (27.8) 刃部幅 3.0				
91		塚ノ山1号墳	鉄 刀 (M1)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	二本芯並列コイル状二 重構造糸巻き(1本の幅 0.2cm)	長 (50.9) 刃部幅 3.2		鞘口と柄縁には鹿角装、赤色顔 料付着	兵庫県立博物館『塚ノ山1号 墳』(2009年、兵庫県教育委 員会)	6c前半
92	大阪府	珠金塚古墳	鉄 刀 (M2)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	二本芯並列コイル状二 重構造糸巻き(1本の幅 0.2cm)	全長 87.4	柄口の一部に鹿角装連る		細川晋太郎「古墳時代中期の 鉄剣と鉄刀の構造―珠金塚 古墳南梯出土刀剣の観察―」 (『古文化談叢』第58集、2007 年、九州古文化研究会)	5c
93			鉄 剣1	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	二本芯並列コイル状二重 構造糸巻き	長 (35.2) 〈復元長 35.3〉	全長 99.5	二本芯並列コイル状糸は、把縁 突起に巻き付けられた後、把縁 側から把頭側に向かって螺旋状 に巻き付ける。断面観察による と、把間を基部の厚みに合わせ るように背側から腹側に向かっ て折り抜き、そこに基部が入り、 背側にできた空間は詰め材を用 いて埋め、その周りに二本芯並 列コイル状糸を巻き付ける		

二本芯並列コイル状二重構造糸巻き

95	大阪府	珠金塚古墳	鉄 剣 2	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	二本芯並列コイル状二重 構造糸巻き	長 (29.0) 〈出土状況等図面 より計測〉	二本芯並列コイル状糸は、把縁 突起に巻き付けられている。把 縁側から把頭側に向かって螺旋 状に巻き付ける	5c	細川晋太郎「古墳時代中期の 鉄剣と鉄刀の構造―珠金塚 古墳南側出土刀剣の観察―」 『古文化談叢』第58集、2007 年、九州古文化研究会)
96			鉄 刀 1	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	二本芯並列コイル状二重 構造糸巻き	長 (68.0) 〈出土状況等図面 より計測〉	把頭材に漆等の接着剤を塗付け ながらコイル状糸を巻き付ける		
97		高井田山古墳	鉄 刀 (3)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	二本芯並列コイル状二重 構造糸巻き(糸幅径 0.2cm)	長 (22.0)	「芯(おそろく2本と推測される) の周囲に別の繊維(材質不明)を 巻き付けて1本にまとめた二重 構造と推測される」	5c後半	『高井田山古墳』(1996年、柏 原市教育委員会)
98		坂ノ山古墳群	鉄 刀	柄木(柄間)柄木の 上に巻く	二本芯並列コイル状二重 構造糸巻きと思われる	長 (60.5) 刃幅 2.5	本鞘が遺存する	5c後半	金原正明「坂ノ山2号墳鉄 刀柄付近出土木材片の顕微 鏡観察結果」『坂ノ山古墳群』 (1987年、高取町教育委員会・ 奈良県立橿原考古学研究所)
99	埼玉県	稲荷山古墳 (第1主体部)	鉄 刀 (1)	柄木(柄間)柄木の 上に巻く	二本芯並列コイル状二重 構造糸巻きと思われる (幅0.2cm程度の柄巻き)	長 (110.2) 身幅 3.8 〈中央部〉	図版によると二本芯並列コイル 状二重構造糸巻きと思われる	5c後半	『埼玉 稲荷山古墳』(1980 年、埼玉県教育委員会)
100			鉄 刀 (2)	柄木(柄間)柄木の 上に巻く	二本芯並列コイル状二重 構造糸巻きと思われる (幅0.15cmの柄巻き)	長 (103.8) 幅 3.7 〈中央付近〉			
101			鉄 刀 (3)	柄木(柄間)柄木の 上に巻く	二本芯並列コイル状二重 構造糸巻きと思われる (幅0.15～0.2cm前後に 燃らせた糸で柄巻きす る)	長 (100.5) 身幅 3.5 〈中央付近〉			
102			鉄刀柄部分 (5)	柄木(柄間)柄木の 上に巻く	二本芯並列コイル状二重 構造糸巻きと思われる (幅0.1cm程度に燃られ た糸で柄巻きする)	長 (9.2) 身幅 2.0			
103	茨城県	三味塚古墳	鹿角装鉄刀	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	二本芯並列コイル状二 重構造糸巻き(巻き密度 1cm間に8本前後)	長 (113.0) 幅 5.0	遺骸の左側から発見。鞘部は鞘 木の上に布を巻き、その上から 幅1cm前後の縫織の布を巻き付 ける	6c初頭	『三味塚古墳』―茨城県行方郡 玉造町所在―(1960年、茨城 県教育委員会、古川弘文館)
104				柄部(柄間)柄木の 上に巻く	二本芯並列コイル状二 重構造糸巻き(巻き密度 0.8cm間に5本前後)	長 (45.0) 幅 3.2	遺骸近くで発見。峰は遺骸の足 の方を向く		
105	熊本県	向野田古墳	鉄 刀 (1)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	平紐で巻く。巻き重ねた 紐ごとの外見上の幅0.4 ～0.7cm	推定残存長 102.0 幅 3.2 〈中程〉 3.7 〈関近〉	表面に布痕がつく	4c末 5c前半	『向野田古墳 宇土市埋蔵文 化財調査報告書 第2集』 (1978年、熊本県宇土市教育 委員会)
106			鉄 刀 (2)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	平紐を巻く	刃部長 58.0 柄部長 22.0 身幅 3.0～3.5	表面に布痕がつく		
107			鉄 刀 (4)	柄部(柄間)柄木の 上に巻く	平紐を巻く	長 107.0 身幅 3.1～3.6	表面に布痕がつく		

二本芯並列コイル状二重構造糸巻き

平紐巻き

108	京都府	椿井大塚山古墳	鉄 刀	柄部(柄間)柄木の上に巻く	幅0.6cmの絹の平紐を巻き、その上に朱が付着	長 (51.0)	木鞘に納める	樋口隆康『昭和28年椿井大塚山古墳発掘調査報告』(1996年、山城町役場)	4c
109	福島県	会津大塚山古墳	鉄 剣 (6)	柄部(柄間)柄木の上に巻く	幅0.7cmの布巻き、その上に漆を塗布する	長 (18.5)		『会津大塚山古墳』(1975、学生社)	4c後半
110			鉄刀(北栢出土)	柄部(柄間)柄木の上に巻く	幅1.0cmの布を巻き、上に漆で固着	長 (80.0)			
111			鉄 刀	柄部(柄間)柄木の上に巻く	布帯紐(布幅1.7cm)巻き	鞘部長 (65.9) 把部長 (5.7)	把頭から布帯紐を巻き、表面に樹脂(黒漆か)を塗布する		
112	宮崎県	島内地下式横穴墓	龍文銀象嵌大刀	柄部(柄間)柄木の上に巻く	2種類の柄巻き。二本芯並列コイル状二重構造糸巻き(巻き密度1cm間に7本前後)の上に幅の細い糸巻きで髹状に巻く	長 98.6		実物調査、沢田むつ代「島内地下式横穴墓より出土した遺物に付着する繊維等について」『島内地下式横穴墓Ⅳ』(2012年、えびの市教育委員会)	5～6c
113	奈良県	藤ノ木古墳	鉄 刀3	柄巻き	2種類の柄巻き。二本芯並列コイル状二重構造糸巻きの上に幅の細い平組紐状の紐を髹状に巻く	長 (130.0) 刃部幅 4.3	二本芯並列コイル状二重構造糸巻きと推測される糸巻きの上に綾杉状の紐(組紐を髹状に巻いたものと推測される)を巻く	今津節夫「XVI 理化学的手法による大刀の構造調査」『斑鳩藤ノ木古墳 第二・第三次調査報告書』1995年、奈良県立橿原考古学研究所)	6c後半
114			振り環頭大刀	柄巻き	2種類の柄巻き。二本芯並列コイル状二重構造糸巻きの上に糸巻きで髹状に巻く	長 (3.6) 長 (8.1)		千賀久「新沢千塚の鉄刀剣」『大和考古資料目録』第16集(1989年、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館)	6c前半
115			鉄 刀1	柄巻き	2種類の柄巻き。二本芯並列コイル状二重構造糸巻き(巻き密度1cm間に8本前後)の上に幅の細い平組紐状の紐を髹状に巻く	全長 108.55		『史跡古市古墳群 峯ヶ塚古墳後円部発掘調査報告書』(2002年、羽曳野市教育委員会)	6c初頭
116	大阪府	峯ヶ塚古墳	鉄 刀3	柄巻き		全長 111.9			
117			鉄 刀4	柄巻き		全長 69.6			
118			大 刀9	柄巻き		全長 110.5			
119	愛媛県	片山4号墳	鉄 刀	鞘部(鞘間)鞘木の上に巻く	藤の蔓を隙間なく葛巻き	長 (76.3) 刃部幅 2.4～3.4	鞘口から20.0cm切先よりでは2本の蔓を束ねて左にねじりを加えつつ鞘口まで巻き付ける	『一般国道196号今治道路埋蔵文化財調査報告』(1984年、財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター)	6c前半 7c前半
120	茨城県	磯崎東古墳	鉄 刀 (第2号墳出土)	鞘部(鞘間)鞘木の上に巻く	植物の蔓を隙間無く巻きつける。蔓の太さは太細まちまちである(1.0cm間に6～7本前後)	長 (77.8)	鞘の木質は側面2枚上面1枚の都合3枚合わせ。鞘口に近い部分に幅0.6cmの皮革と思われる帯状のものを隙間無く巻き付ける	『那珂湊市磯崎東古墳群』(1990年、那珂湊市磯崎東古墳群発掘調査会)	6c
121	宮崎県	小木原2002号地下式横穴墓	鉄 剣 (ST2002-004)	鞘部(鞘間)鞘木の上に巻く	樹皮巻き	長 (68.5) (3部に折損) 刃部幅 4.0	鞘木に樹皮を少しずつづけながら、一方の端をごくわずかに重ねて巻く。表面にあらわれている樹皮幅は0.5～0.7cm(1枚の幅1.0cm前後)	実物調査	5～6c
122		小木原2014号地下式横穴墓	鉄剣	鞘部(鞘間)鞘木の上に巻く	樹皮巻き	現存長 42.5cm	鞘木に樹皮を少しずつづけながら巻く		

123	樹皮巻き	出土地不明	鉄 (不明-05S)	鞘部(鞘間)鞘木の上に巻く	樹皮巻き	現存長 67.2cm 幅 4.3cm	鞘木に樹皮を少しずらずせながら巻く、表面にあらわれていく幅に広狭あり、0.2～0.5cm	実物調査	5～6c
124		宮崎県 築池 地下式横穴墓	鉄 剣	鞘部(鞘間)鞘木の上に巻く	幅2.0cmの樹皮状のものと巻く	長 74.1 身幅 〈関寄り 3.9 中程 3.1〉		『築池地下式古墳発掘調査』宮崎県文化財調査報告書 第21集(1979年、宮崎県教育委員会)	
125	併用種類	国富町川上 地下式横穴墓	鉄 刀	鞘部(鞘間)鞘木の上に巻く	0.2cmの紐巻きの上に樹皮巻き	現存長 74.0cm	樹皮の幅は0.6～0.7cm	実物調査	
126	樹皮巻き	北海道 西島松5遺跡	鉄 刀 (P15墓坑底副葬品3)	鞘部(鞘間)鞘木の上に巻く	黒漆で固定した樹皮巻き	長 (47.1) 刀身元幅 3.4	鞘口部分に平織布付着	鈴木信「V再々報告の金属製品」、『恵庭市西島松5遺跡(4)』北埋調報224集、2006年、財団法人北海道埋蔵文化財センター)、『恵庭市西島松5遺跡』(2002年、北埋調報178集、同上)	擦文初頭 7～8c
127		大阪府 珠金塚古墳	鉄 剣2	鞘部(鞘間)鞘木の上に巻く	三つ組と思われる組紐を螺旋状に密に巻く(組紐幅0.2cm)(図面による判断)	長 (29.0) 〈出土状況等図面より計測〉	鞘間の表面に組紐をほぼ並行して螺旋状に巻き付ける	細川晋太郎「古墳時代中期の鉄剣と鉄刀の構造―珠金塚古墳南隣出土刀剣の觀察―」、『古文化談叢』第58集、2007年、九州古文化研究会)	5c中葉
128		築池15号 横穴墓	鉄 刀 (ST15-009)	鞘部(鞘間)鞘木の上に巻く	組紐巻き(二条軸一間組)組紐1本の幅0.7cm前後	長 (95.0) 刃部幅 3.8	木質の鞘木に組紐をやや斜めに角度をつけて巻く、紐の一方の端をごくわずかに重ねて巻く		
129		桃木畑4号 地下式横穴墓	鹿角装鉄剣 (MM-076)	鞘部(鞘間)鞘木の上に巻く	組紐巻き(二条軸一間組)組紐1本の幅1.0cm前後	長 (77.0)			
130		中迫 地下式横穴墓	鉄 刀 (NZ1-005)	鞘部(鞘間)鞘木の上に巻く	組紐巻き(二条軸一間組)組紐1本の幅0.9cm前後	長 (77.0) 〈中央で2部に折損〉 鞘部幅 5.0	組紐巻き(始めは50°程度、中程から80°近くでほぼ直角に近くなる)であるが、途中から平絹の帯紐巻きになる	実物調査	5～6c
131		馬頭 地下式横穴墓	鉄 刀 (BT-ST50-001)	鞘部(鞘間)鞘木の上に巻く	組紐巻き(二条軸一間組)組紐1本の幅0.7cm前後	長 (91.3) 幅 4.5			
132			鉄 剣 (OH-STB-2-002)	鞘部(鞘間)鞘木の上に巻く	組紐巻き(二条軸一間組)組紐1本の幅0.7cm前後	長 (69.5) 幅 4.0			
133		大萩 地下式横穴墓	鉄 剣 (OH-STB-9-002)	鞘部(鞘間)鞘木の上に巻く	組紐巻き(二条軸一間組)組紐1本の幅1.0cm前後	長 (60.3) 幅 5.7			
134			鉄 刀 (OH-STB-4-001)	鞘部(鞘間)鞘木の上に巻く	組紐巻き(二条軸一間組)組紐1本の幅0.7cm前後	長 (81.9) 幅 4.7			
135		島内 地下式横穴墓群	鹿角装鉄剣 (ST-56出土、 No.553)	鞘部(鞘間)鞘木の上に巻く	幅0.7cm前後の組紐で巻く(二条軸一間組)	長 (約 74.0) 刃部幅 4.8	組紐巻きの上に経錦が付着する	沢田むつ代「出土遺物に付着した繊維について」、『島内地下式横穴墓群』(2001年、宮崎県えびの市教育委員会)実物調査	5～6c

136	鳥取県	長瀬高浜遺跡 1号墳	鉄刀 (F1)	鞘部(鞘間)鞘木の上 に巻く	鞘の上に布を二重以上 巻き(一部しか残存しな い)、幅0.9cmの組紐を 巻く(二条軸一間組)	鞘部長 81.0	『長瀬高浜遺跡発掘調査報告 書 V』(1983年、鳥取県教育 文化財団)	5c中頃
137	奈良県	寺口忍海古墳群	鞘破片：2本分 (28、29)	鞘部(鞘間)鞘木の上 に巻く	鞘木の表面に幅0.5cmの 綾杉文状(二条軸一間組 か)の組紐を密に巻く	長 (約 10.0)	『寺口忍海古墳群』(1988年、 新庄町教育委員会・奈良県立 橿原考古学研究所)	5c末 ～ 6c初
138	宮崎県	築池 地下式横穴墓	鉄刀	鞘部(鞘間)鞘木の上 に巻く	幅0.7cm前後の平織布で 巻く	長 65.6 身幅 2.9	『築池地下式古墳発掘調査』宮 崎県文化財調査報告書 第 21集(1979年、宮崎県教育委 員会)	5～6c
139	福岡県	番塚古墳	鹿角装大刀 (鉄刀1)	鞘部(鞘間)鞘木の上 に巻く	布巻き(切先近くでは幅 0.5～0.8cmの平織布を 巻く)	長 (123.2) 幅 3.8	『番塚古墳―福岡県京都郡苅 田町所在前方後円墳の発掘調 査―』(1993年、九州大学文 学部考古学研究室)	5c末 ～ 6c初
140			鹿角装鉄刀 (鉄刀2)	鞘部(鞘間)鞘木の上 に巻く	布巻き(幅は0.6～ 0.8cmの平織布を巻く)	長 (90.6) 幅 切先側 3.2 側側 3.5		
141			鉄刀 (4)	鞘部(鞘間)鞘木の上 に巻く	幅0.5cmの平紐で巻く	長 (48.5)		
142			鹿角装鉄刀 (18)	鞘部(鞘間)鞘木の上 に巻く	幅0.8cm程度の織物の紐 を巻く	長 (27.0)		
143	鳥取県	セスドノ古墳	鹿角装鉄刀 (3)	鞘部(鞘間)鞘木の上 に巻く	幅0.8cmの布で巻く	長 (81.0) 推定全長 82.0 身幅 3.7	『セスドノ古墳』(1984年、田 川市教育委員会)	5c末 ～ 6c初
144			鉄刀	鞘部(鞘間)鞘木の上 に巻く	平絹(織り密度：経糸24 ～26本、緯糸12本前後) の帯紐(幅3.5～4.0cm) 巻き	長 (80.3)	実物調査	6c
145			鉄刀 (3)	鞘部(鞘間)鞘木の上 に巻く	平織の布を少しずらずら せながら巻きつける	長 111.9		
146			鉄刀 (9)	鞘部(鞘間)鞘木の上 に巻く	平織の布を少しずらずら せながら巻きつける	長 110.5		
145	大阪府	峯ヶ塚古墳	鉄刀 (3)	鞘部(鞘間)鞘木の上 に巻く	平織の布を少しずらずら せながら巻きつける	長 111.9	『史跡古市古墳群 峯ヶ塚古 墳後円部発掘調査報告書』 (2002年、羽曳野市教育委員 会)	6c初頃
146			鉄刀 (9)	鞘部(鞘間)鞘木の上 に巻く	平織の布を少しずらずら せながら巻きつける	長 110.5		

帯紐巻き

147	大阪府	峯ヶ塚古墳	鉄 刀 a	鞘部(鞘間)鞘木の上 に巻く	平織の布を少しずつ せながら巻きつける	長 107.3	鞘口に近い側で布端が0.4～ 0.5cm間隔で並んでおり、縫織り の可能性がある帯状の紐を巻き つけている	『史跡古市古墳群 峯ヶ塚古 墳発掘調査報告書』 (2002年、羽曳野市教育委員 会)	6c初頭
148	奈良県	藤ノ木古墳	鉄 刀 (3)	鞘部(鞘間)鞘木の上 に巻く	幅0.5cmほどの細い平絹 の帯を少しずつせながら巻く	長 (130.0) 刃部幅 4.3	鞘木の上に幅0.5cm程の細い平絹 の帯を端部を重ね合わせながら 全体に巻き込む。鞘の下半部は 布の表面に朱を塗る。鞘の上半 部は鞘と並行に1.1cmの幅で6重 以上に平絹を被せ、責め金具の ようにして平絹と金銅板の帯で 固定する	今津節夫「XVI 理化学的手 法による大刀の構造調査」 (『斑鳩藤ノ木古墳 第二・三 次調査報告書』1995年、奈 良県立橿原考古学研究所)	6c後半
149		寺口忍海古墳群	鉄 刀 (26)	鞘部(鞘間)鞘木の上 に巻く	幅0.8cm程の細い布を巻 く	長 (88.2)	柄元に鹿角装具がある	『寺口忍海古墳群』(1988年、 新庄町教育委員会・奈良県立 橿原考古学研究所)	5c末～ 6c初
150	茨城県	三味塚古墳	鉄 刀	鞘部(鞘間)鞘木の上 に巻く	布巻き (幅約1.0cm前後 の布を巻く)	長 (108.0) 幅 4.	遺骸の右側から発見	『三味塚古墳』-茨城県行方郡 玉造町所在- (1960年、茨城 県教育委員会、吉川弘文館)	6c初頭
151	福島県	大安場古墳	鉄 刀	鞘部(鞘間)鞘木の上 に巻く	布帯紐(布幅2.0cm)巻き	鞘部長 (65.9) 把部長 (5.7)	鞘木の上に樹脂(黒漆か)を塗り、 細組2種類の布帯紐を継ぎ足し て鞘身を巻く。布帯紐巻きの上 に樹脂を塗布する	『大安場古墳群』第2次発掘調 査報告(1998年、福島県郡山 市教育委員会)	4c後半

帯紐巻き

文化財と技術 第7号

2015 年12月1日 印刷

2015 年12月1日 発行

編 集	鈴木 勉
発 行	特定非営利活動法人 工芸文化研究所 所長 鈴木 勉
発行所	特定非営利活動法人 工芸文化研究所 所長 鈴木 勉 東京都台東区根岸5-9-19 (〒110-0003)
印 刷	千葉刑務所 千葉県千葉市若葉区貝塚町192 (〒264-8585)